

元お嬢様(元男)(元勇者)、破産したのでダンジョンに潜る

アトミック

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

元勇者で元男の現お嬢様が元執事と一緒にダンジョンに潜るって
いう、だいぶ属性が多めなお話。

ちよつとだけえつちな展開があるかもしれない（憶測） あるいはず

（適当）

目次

あかね 「どうやら、はさんしたらしい」	1
あかね 「やすたかのいえに、すむことにした」	6
あかね 「ちなみにだが、わたしにこわいものはない」	13
あかね 「いうまでもないはなしたが、わたしはおとこだ」	19
あかね 「ごぶりんっていうのが、いるらしい」	26
あかね 「ごぶりんっていうのは、へんたいにちがいない」	31
あかね 「やすたかは、よからぬことをするのだろうか」	39
あかね 「けなげなやすたかに、ほうびをやることにした」	45
あかね 「だんじよんのまものなど、わたしのてきではない」	54
あかね 「やすたかのゆうじんたちが、とうじようした」	59
あかね 「はじめての、せんとうである」	66
あかね 「せんとうというものは、はじめてである」	73
あかね 「ゆうれいはやばい、こわくないがやばい」	81
あかね 「ゆうれいのおもわくが、わかってしまった」	88
あかね 「やすたかが、でーとにいくらしい・・・」	93
あかね 「へんそうを、してみることになった」	101

あかね「どうやら、はさんしたらしい」

気がついたらぜんぜん金がなくなっていた。
嘘みたいな話だが、嘘じゃなかったらしい。

「……………」

あまりにも急な話過ぎてぼーつとしてしまっていた。

昨日まで住んでいた家にはなんか屈強な人間が山ほど集まってき
てどんどん家財道具を運び出していく。あれだけいた使用人は蜘蛛
の子を散らすようにいなくなり、目の前には得意げにぱたぱたと扇ぐ
早矢仕という男と、こちらを心配そうに見つめてくる美優がいた。

ふふん、と何故かこちらを見下すようにする早矢仕。

あらあら、と心配そうながら、どこか他人気な美優。

合計四つの瞳に囲まれながら、私はこいつら幸せそうだな、とどこ
かずれた感想を抱いた。

「ふふ……ふふははは！ いやいや、まさかこのようになって
しまうとはねえ」

「あー本当だよ。俺……いや、私、明日からどこで寝ればいいんだ？」
ふわあ、と軽く寝惚けた感じで欠伸をすると、早矢仕はさらにご機
嫌な様子を見せた。

我が霧生家没落の原因は、彼にある。というか彼の父親か。あくま
で原因であつて、すべてではない。というか父がうつかりとんでもな
い失敗を十回くらいしてしまい、そこにつけこまれた形なので、もし
かしたら殆どないのかもしれない。ただ、この敷地は彼らのものにな
るらしいので、それはそれは優越感が止まらないのだろう。

「貴方の所為なのによくもまあそんなことが言えるわね……！」

そんな気丈な台詞を吐いたのは美優である。

ただ、小さい。声が滅茶苦茶小さい。それでいて何故かこちらの背
に隠れるような形で早矢仕の方を睨みつけながら言った。どんだけ
ビビってるの？ どっちが破産したお嬢様かわかんねーぞこれ。

「美優クン、それはきみの会社は昔の霧生や今の早矢仕と比べたら格段に小さいということがわかつての発言かな？」

「い、いやあ……」

「ボクが本気になれば君の親の会社なんて簡単に潰せるんだよ？」

「……………」

美優は沈黙した。酸欠の鯉みたいな顔になっていた。波紋の呼吸みたいな音が漏れ聞こえてくるレベル。なんとも友達甲斐のない奴だろう。

「まあ、安心したまえ茜クン。破産したとはいえ元お嬢様。手荒な真似をするつもりなどない。寧ろ、ボクは君のことを高く評価しているんだ」

「評価？」 そんなことをされる覚えがない。

早矢仕とこれまでであったことを思い出してみる。

数年前に初めて会って、いきなり告白してきたのでとりあえず殴った。それでも月に一回は付き纏ってきていたので、基本的に無視をしていた。

……評価される場所が見当たらない件について。あ、あれ……？ 寧ろ恨まれるようなことしかしていない気がしてきた。もしかして私はここで早矢仕にぶん殴られるのだろうか。今までの仇！ みたいな感じで。その方が都合がいい。話は簡単だ。ぶん殴り返してやる！

「茜クン」 早矢仕の目が光った。

「お、おう」

何故かちよつと逃げ腰になってしまった。

一体、何を言うつもりだ、こいつ。

「——君は、胸がとても大きいだろう？」

……

……

……………

はあ？

急に、意味のわからないことを言われたので、赤面してしまった。

「な、なんだオマエ。ヤブから棒に」

「初めて見た時から思ったよ。ああすごいな……って。その衝撃のあまり思わず告白してしまったほどだ」

「あれってそんな理由だったのか……!」

「はつきり言おう。ボクは君のおっぱいを評価している。好きだ。今の、無一文でどうしようもなく生活に困窮している君にも価値はある。僕がその価値を一番理解している。その胸だ。僕はその胸が欲しい。いいたいことはわかるね?」

「わかるか!」

「ならばもう一度言おう。僕は君が——いや、君の胸が好きだ」

「こ、こいつ胸の話しかしてねえ……!」

「とんでもない変態ね、早矢仕くんって」

思わず戦慄する私と、蔑んだように言う美優。ちなみに彼女の声は小さいを通り越して最早私の耳に囁いているみたいな音量になっている。絶対に早矢仕に聞こえないよう努めているつもりなんだろう。ならもう最初から言うな。耳がこそばゆい。

「つまり、だ。別に君はこの家を出て行く必要なんてないということだ。今まで通り、普段通りの生活を保障してあげようとも。まあ家財道具を入れ替えるわけだからだいぶ内装は変わることになってしまうが、裸一貫で放り出されるよりかは幾分もマシだろう?」

……ああ、ちなみに別に変なことをするつもりなんて勿論ないからね」

「さっきの言葉を聞いて信じられると思うか?」

「バレた?」

平然と舌をペろりと出して肩をすくめる早矢仕。こ、こいつ。なんて真剣な目をしてこんなふざけたことが言える奴なんだ。

とんでもない奴である。私は気圧されて、一、二歩後退した。美優も同じようにした。それを見て、にやりと早矢仕は笑う。と、とんでもない悪辣な笑みだ。「そうだ、気づいたかね。そもそも茜クン、君は交渉の場に就ける身分ではもうないのだよ。住む場所も何も見つけ

られてないのだろう?」「四の五言わずさつきと僕のところに来たまえ」

そんな風に、随分と偉そうなことを言いだした。まア早矢仕が偉そうなのはいつものことだ。私は適当に聞き流しながらも、確かにこれからどうやって生活していくか。ひいては住む家をどこに構えるかを悠長に考えながら――

「いいかね、君も女なんだ。暴力ばかりじゃいけないよ。女の子は大人身しく身を引く。君も諦めるという言葉を知った方がいい時期なんだ。わかるだろ?」

――大変聞き逃せないことを言われたので、私は考えを強制的に止めることになった。

「あ……」

美優は気づいたらしかった。「わかってるよね?」と言わんばかりの表情で私の肩を強く叩いてくる。それに軽く頷いて答えると、彼女はホツとしたらしい。胸を撫で下ろすような仕草を見せた。

私は目の前を見る。

いつの間にか接近していた早矢仕が私に右手を伸ばしている。手を取れ、と。こつちにこい、と言っているのだろう。私は思いつきり表情を作り、葛藤するような演技をして、その手を掴み――思いつきり自分の胸元へ引き寄せた。

「え」という声が聞こえる。自分の顔の近くからだった。それもそのはず。早矢仕の顔面は、手を引き寄せたことによって既に私の近くに存在する――

「うおりゃあ――っ!」

全力でぶん殴った。私の拳は寸分の狂いもなく早矢仕の顎を捉え、そのまま彼は空中に数秒滞空し、重力に負けて背中から地面に落ちた。

「あ、アカネちゃん――!?!」

「逃げるぞみゅー。もうここにいる意味なんてない」

私は美優の手を掴んで駆け出した。ああ、そうだ。言っ
てやらなければならぬ。

私はくるりと振り返る。すっかり伸びてしまっている早矢仕が見えた。もう聞こえないだろう。しかし、何も言わないんじや胸がもやもやしてしまう。

「俺は男だ。女扱いするんじやねー」

そう言って、向こうから早矢仕家のなんか執事っぽい人が来たので、私は美優の手を掴んだまま慌てて逃げだした。

あかね「やすたかのいえに、すむことにした」

「なんてことするのよアカネちゃん！ 私心配したんだから！」

「お、そなのか。みゆーも心配してくれたのか。へへ、嬉しい」

「当り前よ！ あんなことして私の家が潰されたらどうするの」

「あ、あれー？ そっちの心配？ わ、私の心配じゃないの？」

当然のように美優は自分の心配をしていた。ちよつとかなしい。

「アカネちゃんの心配なんてしてあげません。大体、何に怒っていたのよ」

「あの野郎。私のことを女扱いしやがった。許せん」

「どんな見た目でそんなこと言ってるの……。アカネちゃんかわいいじゃん。仕方ないよ」

「私のナリが女っぽいのは認める。胸も大きい。みゆーより大きい」

「……そこはどうでもいいわ」美優の目が怖かった。

「と、とにかく！ 私は私の魂を汚されたのだ！ 断じて許せん。私の身体は女っぽい。それはわかる。だが、男ならばこの私の男っぽい魂に気がついてしかるべきだろう！」

「どんな無茶言ってるの。男っぽい魂って何よ。それなら私じゃなくって俺ってずつと言ってるなさいよ」

「だってそう言ってるとお母さんから怒られちゃうし」

「どんな男よそれ！ めっちゃ女っぽいことじゃん！」

指をいじいじ合わせながら言う和美優に突っ込まれた。む、厳しい奴め。

「でも、どうするのよ。あの男殴っちゃって本当に良かったの？ アカネちゃん今お金ないでしょ」

「まあ待てみゆー。私だってな、馬鹿じゃない。あいつを殴ったのは他に頼みになるところがあったからだ」

「頼みになるところ？」

「ああ」

私は携帯電話をポケットから取り出す。ふふん、と鼻歌を歌いながら目的の電話番号を打ち込み、発信。ワンコールでつながる。中々ついてるじゃないか。

そう思っていると、耳元から「電話料金未払いの為発信できません」と聞こえてきた。

「……………」

「……………」

「みゅー」

「なによ」

「け、携帯電話、貸してくれないか？」

美優は虫を見るような目でこつちを見てきて、黙って携帯電話を差し出した。

……目を逸らしたままそれを受け取る。も、問題はない！ 結局ここで電話がつながるのならばなんだっていいのだ。

「どこにかける気なの」

「わからんか。父さんだ」

「…………いや、霧生家はもう潰れちゃったでしょ？」

「あのなあ美優」私は優しい目になった。「どこの世界に娘を見捨てる父親がいるか。こういう時はな、なにかの用心のためにお金を貯めておいてるものなんだ。私の勘だと、近くの公園が怪しいぞ。あそこの砂場の中に隠し財産が眠っているに違いない」

「……………」

美優の目が無視からゴキブリを見るような感じに進化した。進化なのか？

まあ、とにかくそんなことは後回しでいい。何をするにも金だ。つまり、早く父に電話しなければ。

電話番号を打ち込み、発信する。父は情けない人だったが、いつも電話に出るのは早かった。それは、母が「お前は無能なんだから電話番号くらいはちゃんとしろ」と言い聞かせてくれたからだ。よく考えたらうちの家庭は元々終わっていたのかもしれない。ただ、それが生かせる時が今なのだ！

ワンコールでつながる。やはり早い。私は胸を躍らせて……！

「電話料金未払いの為受信できません」

ツーツーと音が響いてきた。私は呆然として電話を取り落とす。慌てて美優が地面に飛び込むのが見えた。

「なにすんのよ！」

「そ、そんな馬鹿な。まさかうちは本当に無一文なのか……？」

「だからそう言ったのよ！ どうして気づかないのよ！」

「……む、むむむ。これはまずい。非常にまずい。私はこれからどうすればいいのだ。お金がないのにどうやって暮らしていけばいいのだ。みゆー、教えてくれ」

「知らないわよそんなこと」

「みゆー、一生に一度のお願いがあるんだが……」

「なによ」

「みゆーの家に居候させてもらうとか、ダメ？」

美優ははあ、と溜息を吐いた。目が怖い。直視できない。

「……いいわよ」

「え！ いいのか」

「別に、アカネちゃんならいいわ。その代わり家の手伝いとかして頂戴よね」

「勿論だ！」

助かった。持つべきものは友である。私はそう胸中で述懐しながらホツと一息ついた。と、そこで「あれ」と声が聞こえた。みゆーだ。携帯が鳴っていた。訝しげにその発信元を見て、みゆーの顔が青褪めるのが見えた。

「なんだなんだ、どうした。悪い奴とかから電話か？ そういう奴らとはツルんじやいけないんだぞ。私がぶん殴ってやろうかそいつら」

「何言ってるの！ 違うわよ」

「じゃあ誰だ」

「……早矢仕くんから」

「え」

私はフリーズした。そもそもどうして美優の電話番号をあいつが

知ってるんだとか、これは非常にまずいんじゃないかとか、いろんなことが脳内を駆け巡った。美優が電話に出るのが視界の片隅で見える。何回も頭を下げているのも見える。次第に彼女はこつちを睨みつけるようにしてきたので、私は頑張って口笛を吹いて誤魔化そうとした。吹けなかった。そうじゃん。できないわ口笛。

やがて美優はなにかを諦めたかのように頷いた。そして、こちらをまた見て……………!

「アカネちゃん」

「な、なんだ」

「やっぱ無理になっちゃった。居候させるの」

「な、な———!」

「早矢仕君がそれは許さんって。そんなことしたら私の会社も潰すって。ま、まあ、仕方ないよね? そんなこと言われちゃったらね、どうしようもね、ないよね?」

「わ、私はこれからどう生きていけばいいんだよ?」

「が、頑張ればなんとかなったりするんじゃない?」

なるか!

私はひったくるようにして美優の電話を奪う。

「おいこら早矢仕! どーいうことだ!」

「おお茜クン。元気だねえ。僕を殴った時から元気が続いているように何よりだ」

「ぐ……………ま、まア、その、すまなかったと思ってるよ」

「別に謝ってもらわなくてもいいさ。ただまあ、美優クンに頼むのは違うだろ。それじゃ詰まらない。やっぱりね、没落した家の人間はそう楽な生活をしちやいけないよ」

「なら私はどーやって生きていけばいいんだ!」

「それを考えるのは僕じゃなくて君の方だろ?」

む、むう…………。その通りだった。

何か方法はないのか。私は様々な方法を考える。考えるが何も浮かばない。誰かを頼りにしようと思ったが、どう思い返しても私に友達達は美優以外いなかった。ど、どうする。どうすればいい。

私の視界が真っ暗になりかけた、その時。

「お嬢様！」

声が出た。後ろからだった。最初は美優のことを呼んだのかと思っただ。そりやそうだろう。今、「お嬢様」と呼ばれるのは私じゃなくて彼女のはずだ。

「……」と声が出る。

その声は、まさか。

「康孝!？」

「お嬢様、大丈夫ですか？ 聞きましたよ家のこと」

「お、おお……お前こそなんだ。使用人は皆どっかに行っちゃったぞ。どうしてお前はまだここにいるんだ」

「お嬢様が心配でした」

ずばりと康孝は言った。私は思わず驚いてしまう。

康孝。いつも下の名前で呼んでいたので上の名前は知らない。私の元使用人兼料理人。歳が近かったこともあってよく一緒に遊んだものである。彼もまた霧生家没落によってどこかへ消えてしまったと思っただが。

「お、お前……わざわざそのために？」

「ええ。随分探しましたよ」

「私が困窮していると思っただか？」

「ええ。お嬢様、生活能力ないじゃないですか」

「む、むう……。それは余計なお世話だ」

「どこがよ」美優に突っ込まれる。「今唯一助けてくれそうな人じゃない」

確かにそうだ。仲の良い人間は美優だけじゃなかったのだ。しかも家のことがなくなっても心配してきてくれるようなヤツだ。な、何とか私の厚かましい願いを聞いてくれないだろうか。

「……な、なア、康孝」

「なんでしようお嬢様」

「お前、家とかあるか」

ちよつと嫌な予感がしたが、考えずに美優に携帯電話を渡す。彼女も何やら嫌そうな顔をしていた。携帯電話を受け取り、そんな表情のまま耳に当てる。どンドン表情は悪くなっていく。一体何を話しているんだ。戦々恐々としながら私は美優の方を見ていると、彼女はやがて電話を切った。そして、絞り出したような声で……！

「……あの、私もその家に住ませてください……」
「なんで!?!」

そういうことになったらしい。

あかね「ちなみにだが、わたしにこわいものはない」

どういうことなのかと言えば、脅されたらしい。

私と康孝が同じ家に泊まる。それがなんとも不安だったそうだが、だから美優もそこに混ぜることにした。何が不安なのか、それで何が解決するのかわからないが、まあいい。こちらからしてみたら無問題だし、なにより美優といえると楽しい。康孝もいいヤツだ。あれだけ前途多難な感じがした未来だったが、何とかかなりそうな気がしてきた。

とにかく、今考えねばならないことは別にある。

その別と言えは――

「うむ、うむ。ここなんていいんじゃないか。築五年、二十畳の2LDK。三人で住むにはちよつと手狭だし、ちよつと風呂も狭い気がするが――これくらいは我慢しなくちやいけないよな、みゆー。切り詰めたおかげで一月二十九万ちよいでいける。ここで決まりじゃないか？ なア康孝？」

「……………」

「甘いわねアカネちゃん。康孝君がいるとはいっても、私たちは女の子なのよ。防犯カメラもオートロックもないところでどうやって暮らしていけというの？ 大体、その家の近くなんて映画館ぐらいしか遊ぶところがないじゃない。こつちだったら駅に近くてシヨツピングモールもあるわ。それでいて一月四十万円弱よ。もうここしかないでしょう、ねえ、康孝君？」

「……………」

「映画館行ってみたいだろ！ なんだ、みゆーは映画見たことあるのか。私はないぞ」

「あるわよ。まあ、確かに楽しいけどね。同じくらいのモニターだつて家にあるもん」

「……………」あの、お二人」

「なんだ」

「なに？」

「舐めてます？」

康孝がマジだった。ちよつと怖かった。私は美優の後ろに隠れようと彼女を探したらもう既に私の肩を持って後ろでぶるぶる震えていた。はや。

「な、なんだ……。康孝、これじゃ不満なのか」

「ええ不満です！ どー考えても高すぎますよ」

「高い？」

私は首を傾げた。高い？ 安いじゃなくてか？

「どーやって三、四十万も払うんです？」

「そ、それは……。私も手伝うよ。ほら、あれだ。アルバイトだ。あれやる」

「月にどれくらい稼げると思っていますか」

「週に三回で五十万くらいかな？」

「もう少し高いんじゃない？」

「……………」

康孝の目がどんどんとやばくなっていた。

私と美優はお互いに肩を抱き合ってぶるぶる震える。

「…………その五分の一くらいですよ、たぶん」

「な！ そ、それでどーやって暮らしていくんだ？ 家に住めないじゃないか！」

「こういうところに住むんですよ、お金がない人は」

そう言いながら康孝はチラシを見せてくる。

私と美優はそれを奪うように取って、見た。

「この3点ユニットバスというのはなんだ、康孝？」

「トイレと浴槽と洗面台が全部同じ区画にあることです」

「この十畳の部屋ってのは何部屋あるの、康孝君？」

「一部屋だけですよ。みんなでそこの部屋に住みます」

「……………」
とんでもない話だった。月五万五千円！ とでっかく書いてある

のがなんともやばそう。こんな端金で家に住んでもいいのか？ そんなことが許されてもいいのか？

「……お嬢様？」

「な、なんだ」

「今何考えてます？ ひよつとして『こんな安い家に住めるのか』とか考えてませんか？」

「い、いやあ……別にいい？」

「美優さんは別にお金が無くなったわけじゃないですけど、お嬢様はお金がないんですよ。映画館に入るお金もショッピングをするお金もないんです。分不相応つてのを弁えないといけないんですよ。今どれだけお嬢様はお金を持っていますか？ それがなくなったらもう暮らしていけないんですよ。その大事さを噛みしめて、これからは生きていかなきゃいけないんです」

「そ、そうだな……」

すっかり説教されてしまった。確かに康孝の言う通りだ。

……ユニットバス。十畳。果たして私は耐えられるのだろうか。いや、ダメだ。そもそも、私は康孝の家に住まわせていただく立場なのだ。美優のように強制されたわけでもない。そのような私が文句を言っつていいはずがないのである。私も男だ。四の五の言わずに覚悟を決めるしかない。

「ちなみに康孝、どれだけ持っているかと聞いたが私は今一円も持っていないぞ」

「……………」

康孝は何とも言えない白けた表情になった。

「あれ」

そこで、美優が急に声を上げた。

見ると、チラシの端つこを指差している。別の物件情報が書いてあるらしい。

「ここ、十八畳だけど三万円に住めるらしいよ」

「おっ？」

「えー！」

とんでもないことを美優が言い出した。そんなところあるの？ どう考えてもおかしい。

が、見てみたらホントだった。ユニットバスでもない。他もフツー。最初に私と美優が候補として挙げたものと比べたら落ちるが、康孝のよりは明らかにいい。ここでいいじゃん。十八畳なら、まあ、何とか耐えられそうだし。

しかし、何故か康孝は首を横に振っていた。

「あ、あのお……ここはちよつとまずいんじゃない？」

「どうしてよ？」

「ここ、有名ないわく付きの物件ですよ」

「いわくつき？」

言葉がよくわからないらしく、美優は唇を可愛らしく尖らせて首を横に傾げた。

「昔、自殺した人が住んでいたんですよ。まだ数年前なんで、当時の空気が残ってるとかで異次元に安くなってるんです」

「自殺う？」 私は素っ頓狂な声が出てしまう。

「好きな人の胸が揉めなくて自殺したらしいです」

「は、早矢仕みたいなやつだなア」

「……まあ、それなら別に問題ないじゃない。幽霊なんていないもの。ねえアカネちゃん」

「う——うむ。ああ、そうだな、うん」

「そうよね。康孝君も別に大丈夫でしょ」

「い、いやあ……その、僕、そういうのちよつと苦手って言うか……」

あはは、と笑いながら康孝は頭を掻く。恥ずかしそうに顔を真っ赤にしてそっぽを向いた。男がそんなことしてもぜんぜん可愛くねえ。ちらりと隣を見ると美優がびっくりするくらい冷たい顔になっていた。わかる。わかるけどそんな顔になっちゃいけないと思う。

「お金の大事さを噛みしめて生きていくのなら、一番安いここにすべきじゃないかしら」

「そ……それはそうなんですけど」

「康孝君、逃げちゃだめよ」

なんかそれっぽい言葉を美優は言っていた。多分最近テレビか何かで見たのだろう。流石である。

旗色が良くなると調子に乗り、悪くなると知らん顔するのが得意なのが彼女だ。まあまあ悪い性格であると言ってもいい。

「お、お嬢様も、大丈夫なんですか?」

「あ、当たり前だろ。余裕に決まってる」

「確か昔怖い話で寝れなくなって……」

「いつの話だ! 私はそんな怖がりじゃない。もうへっちやらだぞ」

「じゃあその家でも大丈夫なんですか? 本当に、そこに毎日住んでも」

「……まア、別にいい?」

目を逸らして言うと、私の目の前に美優の顔があった。「わっ」と鋭い声で言ってきたので、ちよつとびつくりしてしまふ。

「へーアカネちゃん怖いのが苦手なんだあ」

「そこまで好きじゃないだけだ。苦手じゃない」

「ま、まあいわく付きのマンションなんて誰でも苦手ですよ」

とりなすように康孝が言うと、美優はふんと鼻を鳴らした。

「じゃあどうするの? この八畳の部屋にするの? お化けから逃げてる?」

「べ、別に逃げるわけじゃないぞ。ただちよつと雰囲気ビミョーって言うか」

「へー。アカネちゃん、なんていうか、女の子みたいだねえ」

「——ほお、言うじゃないか。いいだろう。住む。そこにする」

「お嬢様!」

康孝の悲痛な声が聞こえたが、無視する。

こ、この野郎。みゆーとはいつても許せない。私を女だと。所詮幽霊に怯える女の子みたいだと。そんなわけあるか!

「だ、大丈夫ですかお嬢様」

「なにがだ。私はお化けなんかこわくない。ていうかいない。だから問題ない」

「だって昔怪奇現象みたいなテレビ番組があると番組表から目を逸ら

「していたじゃ——」

「そんなのしてない」

私は目を逸らしながら言った。美優がその端でくすくす笑っている。

「大体、お前は何なのだ。いいか、女的美優だつて平然と住むと言っているんだ。勇気を出せ。もうここしか住むところはないようなものだ」

「そこまでじゃないと思いますけど……まあ、わかりました。確かにそんな幽霊とかに怯えちややつてけないですよ。ええ。いいですよ、ここで大丈夫です。あ、でも——」

「でも?」

「お嬢様、本当に怖くなったら言ってくださいね」

「怖くなんてなるか!」

妙に優しく言ってくる康孝の視線がこそばゆい。

あかね「いうまでもないはなしだが、わたしはおとこだ」

「なあ、みゆー」

「なに、アカネちゃん」

「果たして私はこのままでいいのだろうか」

私の家が潰れてから二日が経った。

その間に様々なことがあったが、割愛する。いわく付きの部屋がいつも容易く借りられたこととか、そのいわく付きの部屋に住み始めたこととか、私と美優が料理をしようとしてとんでもない失敗をしたこととか。特に三番目の件は「もうお嬢様は厨房に立たないでくださいね?」とやんわり（あくまでやんわりである）康孝に言われたのでちよつとトラウマになりつつある。ので、話したくない。

「でも、別にお化けとかでないモノなんだなー」

「当り前じゃない。存在しないもの。信じてたの?」

「い、いやあ? ちよつと、ほんのちよつとくらいは、かな?」

「まあ良かったじゃない。こここのところ平和そのものよ。初めはどうなるかと思っただけど、結局何の問題もなく進みそうじゃない」

「ああ、そうだな……て、違う! そうじゃない!」

「??? 何が違うのよ」

「平和すぎる。このままでいいのかってことだ!」

「平和なのは良いことじゃない」

「今も康孝はダンジョンに潜っているのだろう。あいつは頑張っている。私がここでこんなのにのんびりしていいのだろうか? いや、いいはずがない。駄目だ。絶対に駄目だ」

私は握りこぶしのまま演説でもするように言った。言ったが、美優にはまったく刺さらなかったらしく、ぽかーんとこっちを見ている。「だって康孝君、アカネちゃんに働いてほしくないでしょ。バイトす

るって言ったら止められたじゃない。『お嬢様にそんなことをさせられません』『お嬢様は家でゆっくりしていて大丈夫です』『お嬢様はそもそもこの社会で働くことが不可能です』って」

「最後のは今お前が付け足した言葉な気がするが……まあいい。それでもだ！ 私がここで黙ってあいつ一人に働かせるのは癪に障る。あいつもあいつだ。私はもうお嬢様なんかじゃないんだから敬う必要なんてないだろうに。それで一人でダンジョン探索なんて危険なことをやりやがって」

「……ふうん。まあ、いいんじゃない。てか、そもそも私だんじょんっていうのがなにかも知らないし」

「私もよく知らん。ただ、なんかどこからか湧いた洞穴に入って、よくわからん危険な生物と戦っているんだろ。探検家みたいなもんだ。危険だ。危険に違うない」

「それで、アカネちゃんはどーするの？」

「手伝う。あいつと一緒にダンジョンについていく」

「それこそ危険よ。私、アカネちゃんに傷ついてほしくないもん」

随分とまあ素直に言う奴だ。私は自分の顔が少し赤くなるのを感じた。

「あら、アカネちゃん顔真っ赤」

「うるさい。とにかくだ。私はダンジョンに潜る。これは決定事項だ」

「もう気持ちは変わらない感じなわけ？」

「ああ。みゆーには悪いが決めた。それに、康孝はなんだかんだでまだ幽霊を怖がっている節がある。今思えばあいつが嫌がついているというのに私が強硬にここを決めてしまった。だったら、私も金を稼いでもっといい家に住処を変えてやらねばならない」

「そう。それなら私もついていくわ」
「え」

美優は当たり前前のように言った。な、なにを。危険なんだぞダンジョン。

そんな簡単に決めるようなことじゃない。そう言おうと思ったが、

彼女の顔色を見るに決意は固い様子だった。どうしてだ。美優はそんなことを言うような奴じゃないだろうに。

「みゆー、どうした。お前はそんな勤労意欲に燃える類の人間じゃないだろ。寧ろあれだ。必死に働いている奴を馬鹿にして家で涼んでいるのが趣味の人間のはずだ。そんなお前がどうしてわざわざ」

「……アカネちゃんが私のことどう思っているのかはさておいて、そもそもついていく以外に選択肢はないのよ」

「どうしてだ」

「私、今すつごく暇なの。夏休みで学校もないし。そんなときにアカネちゃんがいなくなっちゃったら、この家に一人でいなくちゃならなくなるのよ。そんなの耐えられないわ」

「お前は貧乏になったわけじゃないだろ。友達でも誘ってシヨツピングに行けばいいじゃないか」

「詰まらないじゃない。アカネちゃんといった方が何倍も面白いわ」

「みゆー、お前……!」

ぎゅつと美優に抱きつくとても嫌な顔をされた。照れくさがる奴め。

「こ、こら、離れなさい。もうそろそろ康孝君が帰ってくるじゃない。こんなところで抱き着いてこないで頂戴」

「あいつはどーせまだ帰ってこない」

「この抱きつき魔……! そういうこと言ってるとすぐに——」

「ただいまですー、いやあ今日は早く帰れ、て……」

康孝が帰ってきた。タイミングよすぎない? こいつ扉の前で待機してたんじゃないの?

からん、と何かが落ちるような音がする。というか実際に落ちていた。スーパ―で買ってきたのであろう料理やら道具やら。それが床に落ちた音だった。わなわなと指を震わせてこちらを見る彼に、何故か慌てた様子で美優は私から離れようとする。

「あ、あのー僕まだ帰ってこないほうが良かったですかね?」

「そ、そんなことはないんじゃないかなー!? ほ、ほら、アカネちゃん、早く離れなさい」

「なんでだ？ 別に誰かに迷惑をかけてるわけじゃないだろ」

「今現在進行形でかけてるわよ！ ほら、この……っ」

力づくで美優にひっぺかされた。ちよつとかなしい。

「別に康孝君が想像するようなことは何も無いわよ。ちよつとこの馬鹿が調子に乗っていただけ。いつものことよ」

「そ、そうなんですか……？ なんか、その、すごく淫靡な感じが」

「気の所為よ！ どんな目をしているの！ ねえ、アカネちゃんっ」

「そうだな、うん。ちがうぞ。私とみゆーはプラトニツクな関係だ」

「ええ……」

「話がかんがらがるようなことは言わないで頂戴！」

焦ったように美優は言った。

間違った言葉じゃないじゃん。

「ていうかお嬢様、男と女ならどっちが好きなんです？」

「おいおい。何を当り前なことを聞いているんだ、康孝」

「そうよどうしたの。康孝君はちよつと頭がおかしいわ」

「なんか美優さん僕への当たり最近強くありませんか？」

しよぼんとする康孝。それでも何故か彼は私の方を真剣な眼差しで見ている。

よく見ると美優も同じだった。な、なんだこいつら。いつもの様子じゃない。

「すみません、お嬢様。すっかり言葉で教えていただきたいです」

「ねえアカネちゃん。当り前って言ったけど、やっぱり疑問だわ」

アカネちゃんちよつとおかしいし、と付け加えるように美優は言う。しつれーな。視界の端では遠慮げながら少し康孝も首を縦に振っていた。こ、こいつら……！

私は胸を張って、いとも簡単に言った。

「私は男だぞ。——どう考えても、ふつーに女が好きだろう」

「アカネちゃんはね、生まれた頃から前世の記憶があったらしいの。どこかこころじゃない世界で勇者をやっていて、それはそれはすごい活

躍をしたそうよ。それを聞いて私も最初はちよつと頭のおかしい子なのかな、つて思つたけど、生まれてすぐから喧嘩が強かつたし、どう考えても子供じやできないこととかをやつてのける子だったから、仕方なく信じているのよ」

「お、おいみゆー……、頭がおかしいと最初は思つていたのか？」

「前世つて。本当なんですか、そんな話」康孝は何故か少し不機嫌そうだった。

「ええ。だつて私にいきなり『聖剣の振り方を見せてやろー』つて言つて傘をぶんぶん振り回してきたの。どー考えてもやばい奴じやない。なるべく近寄らないようにしようかなつて考えてたもん」

「いや、僕が聞きたいのは頭がおかしい方のエピソードじやないです」

「おいみゆー！ 康孝！ 黙つて聞いていたらしつれーな。もつとマトモなエピソードもあるだろ」

「ないわよ。昔を思い出してみなさい。アカネちゃんが暴れて、知らない男の子がボコボコにされて、親同士の問題になつて、私はその陰で優雅にお茶を飲んでいた。そんな思い出ばかりじやない」

「……みゆーはどちらかといえば私の陰に隠れておびえていたような」

「まあ昔の話はいいわ」

みゆーは無茶苦茶な話の区切り方をした。

「そういえばだけど、アカネちゃん前世の記憶があるのに頭が悪いわよね。どうしてなの？」

「昔から頭の弱い男の子だったからな、私」

「……自分で言うのね、それ」

平然と言うと美優は溺れる魚を見るような目つきでこちらを見つてきた。

な、なんだよ……。私は昔から頭が悪いんだからほうつといてくれ。地味なコンプレックスなんだぞ、地味な。さらつと言つたんだから流してほしかった。

「そんなことより！」康孝が急に叫んだ。

「どーしたんだ康孝」

「そんなことより、ですよ。アカネさんは女の子の方が好きって本当ですか」

「む。なんだよ、文句あるか」

だいぶ康孝は本気らしい。昔からそうだ。私のことを「お嬢様」ではなく、名前で呼ぶときは大体マジな感じの時である。ちなみに昨日私と美優が料理をしくじった時はほぼ呼び捨てみたいな感じだった。クソ怖かった。

つまり、この状態の康孝はまア、中々に危険である。

変なことは考えず、正直に何もかも言った方が吉だ。

「昔はどーだったか知りませんが、今は女性じゃないですか。男にまったく興味がないんですか」

「ああないね。男とキスすることなんて考えただけでも反吐が出るくらいだね。見てくれで私を女だと判断するのは、まア、仕方ないが、中身は元々の俺のままなんだ。どーしようもない話だな」

「ど、どーしようもない話なんですか」

「ああ。どーしようもない話だね」

素直に私がそう言うと、何故か康孝ががつくりと項垂れた。おかしい。私のことを名前で呼ぶときの康孝は大抵真剣で、彼が真剣だということは十中八九私が怒られる時なのに、何故か今の姿だけ見ると私が怒って康孝が落ち込んでいるみたいな感じだ。わ、私は何もしていかないよな。味方を探すように辺りを見回して美優と目を合わせたが、彼女も彼女で呆れたように肩を落としていた。

暗に「アカネちゃんが悪いのよ」と言わんばかりだった。な、何故だ。何故だみゅー。

ちよつと反省しないといけない感じだった。むう。なんでかはわからないが、まア、状況だけ見たら私が悪い雰囲気だ。ちよつとうまいこと場の空気を直すしかない。

「だ、大体だな、どこを探しても男で格好いいと思う奴がいないのだ。私と喧嘩をして、逃げ帰るのはまだわかる。私は強いからな。だがなんだ。『女の癖に』だの『偶然だこんなの』だの。そのくせ二度も三度もぼこしてやったらもう二度と出てこない始末だ。向こうが喧嘩を

売ってきたのが殆どなのに、親を呼ぶ奴だっていた。恥ずかしくないのかね、まったく。あれは駄目だね。男つてものを意識すらできない」

「か、格好いい男にこれまで会ったことがないんですか」

「あえないね。会ってみたいもんだ」

「……………」

なんかもっと微妙な空気になってしまった。

美優も「言いすぎでしょ……………」みたいな感じでこちらを見てきている。康孝は康孝で「頑張らないと……………」と謎の決意表明をしていた。大丈夫かこいつら。

一体どうしてこんな風になってしまったのだろう。

虚空を見てそう考えたが、たぶん、私が悪いんだろうなあという自覚はあった。あつたけど面倒だったから深く考えるのはやめといた。うん。流石私である。

あかね「ぐ」ぶりんってというのが、いるらしい」

飯を食いながら思った。

そういえば、康孝に言わないといけないことがあったんだった。

「そうだ、康孝」

「なんですか!？」

「お、おう……」

あれ以降康孝はちよつと無理してる感じになった。なんでだかよくわからんがふつーに戻ってほしい。その無理なハイテンションは見ていて辛いわ。

「あのな、お前は最近働きすぎだろう」

「? お嬢様の家で働いていた時の方が数倍は大変でしたよ。あの時はダンジョンに潜るだけでなく、使用人としての責務もありましたから」

「あー、それはそうかもしらんが。だがな、今私がこの家でのんべんだらりとしている間にも、お前はダンジョンに潜ってせつせと頑張っているだろう。私はもうお嬢様と呼ばれるような立場ではないのだ。私も日々の食い扶持を稼がねばならぬ義務がある」

「いいえ大丈夫です! お嬢様を養うことが僕の責務ですから」

そう言つて、にっこり白い歯を見せて康孝は笑った。や、やばいやばいやばい。こんなの康孝じゃないぞ。もつとこいつはふつーの奴だったはずだ。たまに怒りっぽくなることと、かなり優しいこと以外フツーの人間だったはずだ。今もまア優しいことを言ってくれているが、こんな強張った笑顔を向けるようなキャラじゃない。私はなんか怖くなつてしまったので美優の後ろに隠れた。

「みゅー……康孝がこわいよお」

「あのね、ああなつたのは貴女の所為よ、アカネちゃん」

「なんで!」

「なんでかを説明するにはちよつと面倒だわ。ていうか理由は康孝

君も言っただけほしくないような気がするし。まあちよつと待つてなさい」

美優はそう言っただけ私から目を切り、康孝と向かい合った。

「アカネちゃん引いてるからそこら辺にしときなさい、康孝君」

「えっ!？」

「そんな急に変貌したらアカネちゃんビツクリしちゃうでしょ」

「そーだぞ康孝。何があつたかは知らんがな、お前はいつものお前がいいんだよ」

「アカネちゃんは黙つててね」

「あ……ハイ」

美優もちよつと怖かつた。私は彼女からすすす、と距離を取つた。な、何だこの空間はあ……。みんな怖いじゃないか。

「もう大丈夫よアカネちゃん。康孝君も元に戻つたわ」

「本当か! み、みゅーももう怒つてないか?」

「私がいつ怒つたのよ。とにかくもう大丈夫だから安心しなさい。ねえ、康孝君」

「はい……反省しました」

「お、おう……元に戻つたか康孝」

「はい。これからはもつと自然な感じで男を磨いていきます」

「……………みゅー、これ、治つてるか?」

「自然にならないじゃない。迷惑なわけでもないでしょ」

いいのだろうか。まず私は康孝が何をそんなに決心しているのかもわからないが。

まあいいか、と思ひ直す。問題はそこじゃない。ダンジョンのことだ。

「康孝、お前が止めようと私はダンジョンに行くぞ。金を稼がないとならないんだろ?」

「ダンジョンは危ないんですつて。もし働くんならお嬢様他のことでも頑張つてください」

「他のことつて何があるのよ」美優がそこで話に横やりを入れた。

「他……他は、その……お嬢様にできること……」

「おい康孝？ 何考えこんでるんだおい。まさか私が何のアルバイトもできない生活能力のないクズだと思ってるんじゃないだろうな？」

「お、思ってるわけじゃないじゃないですか……」

語尾が震えてんぞ康孝。

私は確かに料理を作ることできないし、部屋の掃除も嫌いだし、頭を使うことも中々不得意だし、とんでもないくらい不器用な人間だが、それでもなんかあるはずだ。……あるかなー？ 自分で言ってるまあまあ不安になってきた。

「アカネちゃんの天職がそれなのよ。よく考えてみなさい康孝君。昔からアカネちゃんは人を殴って過ごしてきたわ。それしかできないのよ。ここで、そのだんじょんとやらに行かせなかつたらグレちゃうのよ。最近寝言で『あーそろそろ人殴りてー』とか言ってるのよ」

「言ってるわけないだろ！」

知らんけども！

しかしながら何故か康孝は神妙な顔になっていた。い、言っていないよね。おかしいんだけど。そんなこと深層心理でも考えているはずがないんだけど。

「……ですが、危険なんですよ」

「大丈夫よ。自分の身は自分で守れるわ、アカネちゃんは。だから私の身もアカネちゃんに守ってもらおうもの」

「めっちゃ他力本願じゃん。まアいいけども」

いつも通りの美優の発言に私は逆に安心した。

一方、康孝はうーんと何やら唸っている。まだ悩んでいるのだろう。ええい、男らしくない奴め。

「康孝、安心しろ。私は大丈夫だ。みゆーの言ったように、ダンジョンは私に最も向いていることに違いない。いや、まア他のことが何もできないとかそういう意味じゃないんだが、私も男だ。そういう洞窟に入って冒険するみたいなのはまあまあ好みなんだ。な、いいだろ、な？」

「……………うーん」

「あんまり長く考えすぎる奴は男っぽくないぞ」

「——わかりました。行きましょう。そうしましょう」

すぐに康孝は決意したらしかった。

……男を磨くだのなんだの言ってたからテキトーに言ってみたが効果抜群だった。これから康孝に口で負けそうになったら使うようにしよう。私は密かにそう決心した。

「……アカネちゃん、悪女の才能があるわね」

みゆーが小さくそんなことを言うのが聞こえたが、無視した。

一日経った。

私たちは朝出かけることにした。美優はゆっくり出かけたかったらしいが、朝早くの方が危険な生物に会うことが少なくなるという康孝の無難な意見と、私の最初は経験者に従っておくべきだ、という追従に仕方なさそうに頷いた。ダンジョンというものが楽しみで眠れるか心配なんだろう？ と私が美優の考えを当ててみようとしたら、アホを見るような顔になった。どうやらただただ自堕落に眠っていたかっただけらしい。

ダンジョンは家からまあまあ近くにあった。歩いて三十分以内。気軽に行ける感じである。

「それにしても、美優さんもダンジョンに来るんですね」

「だよな！ 私も最初は驚いたぞ」

「てつきり家でぐっすり寝ているものかと思っていました」

「私も、面倒だからパスとか言うんじゃないか不安だった」

「あなたたちは私のことをなんだと思ってるの？」

「今世紀稀に見るクズだと思ってる」

正直に私が言うと美優は無言で頭を拳の角っこでガンガンやりだした。痛い。フツーに痛い。

「それで、中にはどんな生物がいるの？」

「美優さんはゴブリンってわかりますか」

「聞いたことはあるわ。でもそれ物語の話でしょう？」

「それにそっくりのやつがいっぱいいます。まあ、軽く入り口付近で

たむろするくらいだったらそこまで危険ではないと思いますが……」
「ゴブリンかあ」

小さく溜息を吐くように言うと、何故か二人の目がこちらを向いた。

「な、ナンダヨ。どうして二人してこっちを見るんだよ」

「いや、その」

「なーんか見たことあるみたいに言うじゃない」

「そらそうだろ。テレビでも見たことはある。みゆーが興味を持たなすぎなだけだ」

「お嬢様って、そういった番組をご覧になられていたの？」

「勇者だからな。世界をかつて救った男だぞ」

えへん、と胸を張ったが、残念なことに大変反応が悪かった。

美優はもうだいぶ疲れたような目でこちらを見てくるし、あの康孝でさえ半目になっていた。な、なんだよう。本当に勇者だったんだからな！

「とにかく、お二人とも僕の後ろから離れないでくださいね。危ないですから」

「む。康孝、お前なに女の子を守る騎士みたいなことを言ってるんだ。言っとくがな、私はおと——」

「はいはい。アカネちゃんも黙ってて。とにかく行きましよう」

そんな風に言い合いながら、私たちはいよいよダンジョンに足を踏み入れた。

あかね「ぐぶりんっていうのは、へんたいにちがいない」

「思ったより明るいな。てか、電球みたいなものがわざわざ配置されてんだけど。最初からこんな仕様なのか」

「そーですね。中に入る人のための心づもり……優しさでしょうか」

「人を襲うダンジョンに何の優しさがあるんだ？」

康孝が天然でボケをかましていた。そのおかげでだいぶ空気が和らいでいた。

私も少しは緊張していたし、康孝もそんな感じがした。彼はまあここに何度も来たことがあるのだろうし、純粹に私たちを心配しての緊張だろう。その心配の中に私が含まれていることが大変遺憾ではあるものの、この場では何も言わないことにした。美優に注意されたいな。

さて、その美優である。ダンジョンに入ってからだいぶ委縮してしまったのか、喋らなくなった。私も一応前調べというものをして、最初の階層でうろつく程度ならば成人が死ぬことは殆どないということとは知っていた。そのことは彼女にも一応伝えたのだが、まあ、仕方のないことだろう。昔から喧嘩になると私の後ろに隠れていたのが美優だ。いつも通り私が守ってやるだけである。

「で、ここのダンジョンに入って、何をすると金がもらえるんだ」

「地図を作ることです」

「地図う？」

「はい。このダンジョンは、入る時間帯によって毎回形が変わります。その変化に法則性があるのかわからないのかはわかりませんが、そのデータのサンプルがあると次にダンジョンに潜入する人の利便性の向上につながるんじゃないか、なんて考える人もいるんです」

「それでお前はわざわざメモ帳を持ってきたのか。言ってくれたら私も持ってきたのに」

「お嬢様は初めてじゃないですか。別にそんなことをしなくてもいいですよ」

「む」

「まただ。まーた康孝が私を気遣いやがった。」

「あ、アカネちゃん」

「お。なんだみゆー。さつきまで随分と黙っていたじゃないか。どーしたどーした」

「う、うるさい。後ろみなさいよ、後ろ」

「なんだ、と美優が指す方を見て、うお、と私は驚いた。二足歩行の、身体が緑色の毛むくじやらがいた。随分とまア身体は小さく、私は半分かそれ以下くらいな感じだ。「あれがゴブリンか？」と康孝に尋ねると、彼は重々しく頷いた。」

「そんな警戒するようなもんか、あれ」

「別に、そんなに悪いことをする生物ではないですが、目を合わせると近づいてきます」

「いーじゃないかそれくらい。私は大歓迎だぞ。見方によっちゃ犬みたいで可愛くないか？」

「どこがよどこがー」美優が吠えた。「なんか変なニオイするし絶対無理よー」

随分とでかい声で美優はゴブリンを拒否していた。そ、そこまでかな。確かにちよつと変なニオイだが、嗅ぎようによつたら犬とか猫みたいな獣臭にも感じないことはないか？ ないか。

「ゴブリンは悪戯が好きなんですよ。人の驚く顔を見るのが好きなのか知らないですけど、鞆とかをひつたくったり急に現れて脅かそうとします」

「ふつーに嫌な生物ね、それ」

「ちなみになんだが、あのゴブリンめつちやこつち来てるぞ、みゆー」
「え、えええ!! どーしてよー!」

「お前がさつき叫んだからだ」

ゴブリンは一目散にこつちに駆け出してきていた。人間のことが随分と好きな感じの生物らしい。

「ど、どうするのこれ」

「見つかったらどーしようもありません。逃げてもいいですけどゴブリンは無駄に足が速いのでだいぶ疲れますし、地図を取る暇がありません。ちよつとの間相手をしてやりましょう」

「殺しちやダメなの？」

「みゆー……、お前とんでもないこと言うなあ」

だいぶ美優は精神的に参っているらしかった。

そんな会話をしている間にもゴブリンはすごい勢いで近づいてきていて、あれよあれよという間に私たちの前に辿りついていった。

「オ……オオ、オオオ」

ゴブリンが血走った目で見つめているのは美優だった。たぶん、一番怯えているというかそんな雰囲気なので、驚かせやすいと感じているのだろう。

美優はいつものように私の後ろに隠れた。仕方のない奴め。私は胸を張り、ゴブリンの方を見る。向こうもそこでようやく私の存在に気づいたのか、「オオ……」と妙な声を上げながら靴をちよんちよんと叩いてくる。なんだ、中々可愛いところもあるじゃないか。そう思い、私はちよつと腰を下ろしてゴブリンを見つめていると……！

「オオ……ッ！」

むんず、と。

ゴブリンは急に私の胸を揉んできた。

「わひやあ!？」

すっごい変な声が出た。な、なにをするんだこいつ。

「お、おい。こいつ聞いてたのと違うぞ！ ただの変態じゃんか！」

「驚かせようとしたんじゃないの？」

「確かに驚いたけども！ そ、そんな感じのヤツなの？」

「私を知るわけじゃないじゃない。康孝君に聞きなさい——って駄目だ。今ちよつと人の話を聞ける状態じゃなくなってるわ」

何故か康孝は呆然とできの悪い彫刻みたいに固まっていた。最近

康孝のイメージがだいぶ悪くなってる気がする。なんでだ。

まア、とにかくこの状況をどうにかしないとイケない。このゴブリン、なんということかこうやって美優と喋っている最中にも胸を揉んでくる始末である。あり得ん。私は全力でゴブリンの頭を掴み、私の身体からひっぺかした。幸いにもこの生物は大して力が強くないらしく、抵抗はするものの軽い力で引き離すことができた。

ばたばたとゴブリンは手を暴れさせるが、胸から離してしまえばなんも怖くはない。何も掴めず空中で空気を搔くこと以外何もできない存在である。こうやって見てみるとなんだ。まアまア可愛いじゃないか。私はぼんやりとこの奇妙な生物を眺めながら小さく笑みを零している……！

「オオ……ッ！」

むんず、と。

ゴブリンはいきなり私のスカートを掴んで引っ張ってきた。

「うわあっ!？」

こ、こいつ！ 腕がそうとしてやがる！ 私は慌ててゴブリンをより遠くにひっぺかそうとしたが、今度はスカートから手を放そうとしない。それどころか全体重を預けてぶら下がる格好になってやがった。

「おい！ こいつおかしいだろ！ もう脅かそうとしてるとかそんなレベルじゃないんだが」

「知らないわよ。早くどうにかしちやわないと他のゴブリンとかも来ちゃうんじゃないの」

「そ、そう言われてもだな——あつ！ この野郎、スカートから私の身体に這いあがつてこようとするんじゃない！ こ、この、クソ、妙にしぶとい……！」

「ちよつとー康孝君が使い物にならなくなるから早くどうにかしなさいよー」

自分に危害がないから余裕ぶりやがって！

私はちよつと腹が立った。あくまでちよつとである。元勇者の私がそう簡単に怒るものではない。たとえこのよくわからない生物にセクハラをされても、美優がいつものように悪い性格を発動させても、何故か康孝が固まってもそんなには腹が立たないのではあるが、まア廻り合わせというか、なんとというか。少しずつ自分の中のメーターが上昇している感じはあった。

そこで、である。ゴブリンをひっぺかそうと強めに引つ張ったとき、ベリベリ、という糊が剥がれるみたいな音がした。なんだよ、と音が鳴った方を見ると、そこは私のスカートだった。だいぶ長いタイプのヤツだったんだが、まア見るも無残なことに元々あった長さの半分くらいになっていた。

残りの半分はゴブリンが握っている。

「あ、やっべー！」みたいな顔で舌を出しているゴブリンが握っている。

………。

………。

「この野郎おーっ！」

思いつきりゴブリンをぶん殴ると、だいぶ遠くの壁まで吹き飛んでいった。

そんなわけで、一体ゴブリンを倒した。

まア、だから何だって話である。大変残念なことに、別にモンスターを倒したからって経験値が入るわけじゃない。ここはそーいう世界じゃないのだ。

十年後の渋谷でトレンドになりそうな格好で私は佇んでいると、康孝はようやく動き出した。とはいっても慌てた様子なのは変わらな。自分のバッグを弄りだし、何やら探している様子だった。一体何をしているのだと私は見ていると、お目当てのものを見つけたらしく、急いで取り出した。

「お、お嬢様。これどうぞ」

一体なんだ、と思ったらジャージだった。

「お前、どうしてこんなものを持つてたんだ？」

「ダンジョンの中は汚れることがありますから」

「じゃ、別にいいよ。康孝の服を取るのも悪いし」

「い、いや……その。その格好でいられると、こっちも困るって言うか」

「む」私は少しだけ顔が赤くなるのを感じる。「気になるのか、オマエ」

「……はい、気になります」

「……なら、もらっとく」

妙な空気になったのでひったくるようにジャージを受け取った。

「康孝は向こう向いててくれ」と言っておいてスカートを脱ぎ、ジャージを着く。身長は私よりも康孝の方が10センチくらい上なので、だいぶダボダボだった。女の身体になってんなあ、と今更ながらに思い、複雑な気持ちになる。

「……穿いたし、行こう」

「……は、はい。そですね」

妙な、なんとも言えない空気の中。

「ちなみに今のはアカネちゃんが無神経だと思おうわよ」

「え、そうなの!？」

美優に真面目な感じで言われた。

ゴブリンはもう出てこなかった。普段はもっと大量に湧くらしいし、辺りから気配らしきものは感じるのだが、何故か出てこない。「不思議ですね、警戒しているのでしょうか？」と康孝は言ったし、美優は「アカネちゃんが乱暴な所為じゃない？」と言った。私も薄々さっきの蛮行が原因なのだと気づきつつあったが、まあ気にしない。どこの世界にもモンスターのことを心配する勇者などはいないのだ。

さて、そんなわけでダンジョンの中を探索することはできた。康孝が真剣にメモを取ったおかげでダンジョンの全体図を明示することもできた。やるべきことはすべて完了したと言えるだろう。

もうあとは帰るだけなのだったが、ちよつとだけ気になることが

あった。最初の階層と康孝は言ったのである。その言葉が意味するのは、つまりこの下にさらなる階層が存在するわけだ。よくあるゲームみたいな感じで、下に下に進んでいくのだろう。

そしてさらに付け加えるのなら、この道中で偶然にも梯子みたいなものを発見した。

「な、なア、康孝」

「駄目です」

「ナンダヨ。まだ何も言っていないじゃんかよ」

「もつと下が見たい、って考えているんでしよう?」
う。

こいつ、私の考えていることがなんでわかるんだ。

私が言葉に詰まって吹けない口笛に頑張って挑戦していると、呆れたような目つきで二人に見られた。

「危ないからこの階層までにする、って条件でくるのを許したんですよ?」

「アカネちゃんって本当に馬鹿なのね。そんなにこの生物と戦いたいの?」

「い、いやあ、違うぞ? 私だって乱暴じゃない。見てみたいだけなんだ」

「じゃあどうして今拳を握り締めてるんですか」

「これはその……武者震いのな?」

「戦う気満々じゃないですか」

康孝は半目になった。なんか目を合わせづらい。クソ気まずい。

「アカネちゃん諦めなさいよ。康孝君は経験者だし、アカネちゃんはゴリラだからいけるかもしれないけど私はどうなるのよ。もし本当に行くなんて強情張ったら私は泣くからね。ここで。今すぐ。そんなことになったら大混乱よ、阿鼻叫喚よ」

「誰がゴリラだ、誰が。あと後半何言ってるかわかんなかったんだが」

「阿鼻叫喚のこと? 要するに大変なことになるってこと」

「いやそこじゃなくて混乱ってどういう意味だ?」

「そこがわかんないの!?! 小学校からやり直した方がよくない?」

「うるさいな！　で、どんな意味なんだよ」

「阿鼻叫喚とだいたい同じよ！」

美優がとんでもなく見下した目で私の方を見てきた。

助けを求めるために康孝の方を見たが、逸らされた。そうだった。あいつは中卒だ。とんでもなく貧乏という家庭の事情があるのである。知能レベルで言えば私とおんなじくらいのはずだ。

「なア康孝、お前も混乱なんて知らなかっただろ？」と私は逆に元気をもらうために聞いてみると、彼は「い、いやあ……」と頭を掻いた。なんだその微妙な反応。知らなかったのを恥ずかしがっているともとれるしフツーに知っていて私が恥をかくのを躊躇っているともとれる。

おいおい。

もし後者だったら私は中卒の康孝よりも馬鹿だということになるぞ？

まさか。まさかね。

私はちよつとだけ怖くなった。よく考えたらもう私にお金とかってないんだよな。この頭のレベルで私はフツーに暮らしていけるんだらうか。

美優と康孝に引つ張られてダンジョンから出る最中、私はそんなことを考えて無性に怖くなった。大変気分が悪くなりました。まる。

あかね「やすたかは、よからぬことをするのだろうか」

「なあ、みゆー」

「なに、アカネちゃん」

「康孝を尾行しよう」

私の提案に美優はちよつとだけ目を大きくした。

「どーしたのよ急に」

「だつて暇だろ？」

「それにしても、よ。こーやって家でダラダラするのをやめて、康孝君を尾行するのを優先する理由はなに？」

「うーん」

なに、と聞かれると困る。まアまったくの思い付きというわけではないのだが、そうすごい明確な理由があるわけじゃない。私はただ胸の中に湧く一つの感情に従って行動しようとしているだけだ。それをどう言葉にすればいいものか。

「そうだな……うん。そうだ」

「どういう理由なの？」

「あいつのことが気になるんだ」

がたん、と美優は音を立てて転んだ。おいおいどーした。手押し相撲に負けた子供みたいな格好でひっくり返っている彼女を見て私はちよつとだけ呆れた。急になんだよ、急に。

美優はその格好のまま頬をみるみる赤く染めていった。

「き、気になるって、どうしてよ」

「そのままの意味だろーが。あいつが今何やっているのかがとても気になる。気になって気になって居ても立っても居られないから尾行したいんだ」

「——アカネちゃん」

「な、なんだよ」

「ついにアカネちゃんも女の子らしくなったのね……！」

美優は私の背中をばんばんと叩きだした。まじでどーした。とい

うか今の言葉は聞き逃せないんだが。

「私のどこが女だおい」

「いいのよ強がらなくて。私にもあったわ。中学の頃ね、田沢君って男の子のことが気になってしょうがなかったの。今思えば思春期の気の迷いだったのかもしれないけど、いい経験だったわ。アカネちゃんにもね、今になってその思春期が訪れているのよ。春よ。春が来たのよ」

「あのな」

どうやらとんでもない勘違いを美優はしているみたいだった。

私は半分呆れながら言った。

「私が気になっているのは、あいつがああ五千円をどう使うかだよ」

五千円とは、あのダンジョンを出た後に私たちに配られた金額である。

私はあの屋敷を早矢仕に取られて無一文でここに来た。康孝はそんな私を気遣ってくれたのだろう。ダンジョンで得た地図をすぐに売り捌き、現金化して三等分した。たかが一階層の地図で一万五千円も得られるものなのか、と私は感心したが、康孝が「あのダンジョンで一日中歩き回って、ゴブリンに嫌がらせをされながらメモを取り続けるのは中々重労働なんですよ」と言うのを聞いてまアそうなのかもしれないなと思ひ直した。

そんなわけで、全員に五千円が配られたのが昨日のことだ。

そして昨日、康孝は私に向けてこんなことを言つてのけた。

——お嬢様、その五千円は大事に使ってくださいね。決して無駄遣いなどをしてはいけません。まだお嬢様は金銭感覚が狂っているのかもしてませんが、少しずつ矯正していかないとけませんよ。

随分と正論をいう奴である。昔から康孝はこーだったのだ。口を開けば誠実なことを言う。

ただそこで少し気になることがあった。よく考えてみたら私は康孝のプライベートな部分をまったく知らない。あいつは私にはなかなか上等な口を利くやつではあるが、ほんとにそんな真面目な奴なの

か？ 大抵、あーいう善人には裏の顔があるものなのだ。最近読んだ漫画もそうだった。

あの五千円でいかがわしい店とかに行っているのではなからうか。中々それは面白い展開なのではなからうか。

そんな興味に突き動かされて、私は康孝を尾行したくなったのである。

「……………なによ、ぬか喜びさせないでよ」

「元々みゆーが勝手に勘違いしただけじゃないか？」

そんなわけで。

私と美優は康孝をこそこそと尾行していた。

「もう康孝君五千円使い切っちゃったんじゃないの？」

「そんな馬鹿な。あいつが家出てから五分で追いかけたんだぞ。すぐに追いついたしまだ使う時間なんてなかったはずだ」

「まーそれもそうね。でも別に今日使うとも限らないでしょ」

「いや使うね。あいつはなんたって善人みたいな奴だからな。完璧に見える奴は大抵裏でとんでもない悪事に手を染めてるものなんだぞ」

「アカネちゃん最近漫画読んだ？」

美優はビミョーな感じの視線でこつちを見てきた。ちよつとどきりとしたが黙っておく。

「そんなことよりも田沢って誰だ。私は知らないぞ」

「ま、まあ、その話は良いじゃない」

「いや私は康孝のことと同じくらい気になってるんだが……」

「あ！ 康孝君がなんか謎の店にこそこそ入っていくわよ！」

「なにっ」

本当だった。

私はとりあえず美優の話は後回しにする。……するけど、だいぶ気になる。田沢って誰だ？ かなり聞き覚えのない名前である。中学生の時なんて私は美優とよくいたんだから、聞いたことも見たこともないなんてかなりおかしい話だ。今度中学校の頃の卒業アルバム見てみようかな、なんて考えていたけど、よく考えたら私は持っていない

かった。そーいやあのなくなった元屋敷に放置してたわ。ちよつと
がっかり。

「おい、なんだあの店は。妙にちっこいぞ」

「怪しいわね。地下にあるのかしら……？」

ひそひそと話しながら私たちはその店の入り口に近づいていく。

そこには「アリス」と書かれた少女漫画チックな店があった。メル
ヘンな感じのヤツだ。女の子以外立ち入り禁止です、と前面に表現さ
れているような場所。そこに康孝は入っていったのである！

「……あ、あいつ。中々面白い趣味を持ってやがるじゃないか」

「ま、まあ、個人の趣味だもんね。私は否定しないわ。アカネちゃん
はどう？」

「好きじゃない」

正直に言うと、美優はむ、とビミョーそうな顔になった。

「で、でもね。最近は多様化が進んでいる時代よ。男の子だってお人
形遊びをしてもいい時代がもう近づいてきてるのよ。アカネちゃん
は古いわ。昭和よ。男とか女とかで差別をしちゃいけないわ」

「いや違うね。男はな、誰よりも頼られるような存在でなければな
らんのだ。私だってな、否定をする気はないぞ。ただ、あいつが私の
前で男を磨くだのなんだの言つて、こういう店にこそそと入ってい
くのがどうも気に食わんのだ」

「そ、それはね」

「まあ、私の勝手な意見だ。否定する気も強要する気もない。ふん。
中を見てやろうじゃないか。どうだ、あいつの吠え面を拝んでやろう
か」

「馬鹿！ かわいそうじゃない。やめなさい」

美優は私の首根っこを掴んで引つ張った。ぐえ、と喉から帰るの潰
れたような音が漏れるが、彼女は気にした様子を見せない。まあいい
か、と私はしばらくそのまま素直に引きずられた。

別に、康孝が何をやろうが勝手である。あいつのすることはあいつ
自身が決めるべきなのだ。そんなことはわかつてる。わかつてい
るが、妙に気に食わない。たぶん、古い付き合いのあいつが私の予想

外の趣味を持っていて、それが彼のイメージにどうもそぐわないのが、なんとも気に入らないのだ。

「アカネちゃんはあれね、束縛するタイプね。自分の思い通りじゃないと許せない系の人間よ」

「む、むむ……そなのか。私はそんな面倒くさい感じのヤツなのか」

「ええそうよ。面倒くさい女の典型例だわ」

「しつれーな。私は男だ」

「はいはい」

美優は私の宣言をテキストに流した。む。最近康孝も美優も私の言葉を軽く扱い過ぎである。ちよつと不満げに彼女を見つめてみたが、「なにかわい子ぶってんの」と頬を引つ張られた。全然意図が伝わってない。

美優が私の頬を好き勝手に弄り回していると、急にその手を止めた。「あ」と声が聞こえる。なんだなんだと彼女の視線を追うと、そこには康孝がいた。足早にアリスとかいう店から出てきて、脇目も振らずに走り出していく。まったく、恥ずかしがるのならば入らなければいいのだ。なんとも男らしくないヤツめ。

「どーするの、アカネちゃん」

「何がだみゅー。もう用は済んだぞ」

「いやあ……でも、康孝君が何を買ったのか気にならない？」

「む」確かに気になる。「しかし、私があのお店に入るのか？」

「何。いいじゃない。ちよつとくらい覗いてみたら？」

「私は男だぞ」

「こんな胸して何言ってるんだか」

そう言うや否や美優は私の胸を揉んできた。

「な、なにすんだー！」

「うるさいわね顔真っ赤にしちゃって。私は折角だからこのお店に入ってみたいのよ。康孝君がどんな趣味を持っていようが正直興味なんて全くないんだけど、私の経験上こういうお店に入ったことがないのは、どうも許せないの」

「ゆ、許せない？」

「ええ。私の知らないことをそのままにしておきたくないじゃない。だからアカネちゃんも付き合って」

「むう……」

ま、まア、美優がそう言うのならばやぶさかではない。でも入りた
いんなら最初から言ってくればいいのに。なんでまあわざわざ「康
孝君が何を買ったのか気にならない？」なんて私に聞いてきてまでは
いる理由を別に作ろうとしたのだ。

ちよつと不服そうな顔をして美優を見つめたが、彼女はどこ吹く風
だった。さあいきましよう、なんて行って私の手を掴んで「アリス」へ
向けて歩を進める。されるがままになりながら、私は、みゆーがこん
なにノリノリなの久しぶりに見たなあ、と嘆息した。

あかね「けなげなやすたかに、ほうびをやることにした」

「すごいわアカネちゃん！ 綺麗よ。このポーチもアクセも中々センスがあると思わない？」

「あーそうだな。うん。確かにそうだ」
入って数分。

私は美優が別に理由を作ったわけがわかった。
簡単な話だった。美優はこういう店が好きだったのだ。

で、ちよつと前に私が康孝がこういう店に入っていくのを批判したもんだから、言いだしづらくなっていたのだ。

馬鹿な話である。私はあくまで男がこういう店に入るのに否定的な、頭の固い意見を言っていただけで、美優みたいな感じの女の子が入るのはなにもおかしくなんて思わない。寧ろよくお似合いである。

そのように説明するや否や、美優はすっかり素を出して楽しそうにショッピングを満喫している。実にいいことである。彼女が楽しそうな顔をしているのを見ると、私も嬉しくなってくる。

ただ、一つ不満な点があるとすれば。

残念ながら、私はあまりこういう店に関心がないのである。

「……………」

見るものも買うものもなく手持ち無沙汰になってしまった。どうしよう。少し考えて、私は「あ」と思いつくことがあった。

そうだ。そうだったじゃないか。康孝が何を買ったかだ。

さつきまではこの店に入るのに抵抗があったが、入ってしまえばもうそんなものどこにもない。美優はショッピングに夢中な様子だから、暫くは放っておいても問題なんてないだろう。適当な店員を探し、私は恐る恐ると言った感じで話しかける。

「あ、あのお……………すいません」

「はい、なんででしょうか?」

にこにことした店員に、私は少し戸惑ってしまふ。なんとというか、こんな感じのいい人間と話したのは久しぶりである。最近美優と康孝以外の人間と話してなかった所為だ。随分とまア人見知りが酷くなつたものである。

私は小さく深呼吸し、気を落ち着かせた。

「あーその、さつき、ここに男が来ませんでした?」

「……? はあ、そうですね。来ました」

「ええと……その、なんていうのかな。何を買つていったかとかつて、教えてくれたりします?」

「うーん」

店員さんは品の良い顔をそのままにして、首を横に傾げた。言つてもいいものか、考え込んでいるのだろうか。客の個人情報だもんな。そりゃ断られるのが当たり前で、無理なお願いをしてしまったのかもしれない。

「たぶん、お客様がどの方のことを尋ねられているのかは、わかりません」

「はい」私は言いながら、でも個人情報だから言えないのかな、と思つた。はたしてその通りで、可愛らしい店員さんは唇をちよつと尖らせて「でも、そういうのは言いづらいんですよね」と内緒話をするような気安さで言つてきた。そらまあ、そうだ。無理に聞いているのがこつちなのだ。

私は素直に諦めよう、と決めて引き下がろうとし、そこで「しかし」と店員に呼び止められた。な、なんだ。なにがしかなんだ。何か悪いことをしたか、私。戦々恐々と震えていると、店員は何故か目をきらきらさせながら言つてきた。

「さつきの男の人との関係なんですけど——もしかして、付き合つてるんですか?」

そんな、ふざけた言葉だった。

「だ、だだ、誰が——!」

「何顔真っ赤にしてるの、アカネちゃん」

「み、みゅー！　どーしたお前ショッピングは」

「もう済ませたわよ。で、何？　なんでアカネちゃんは顔を真っ赤にしているの？　もしかしてその可愛い店員さんに康孝君と付き合っているのかどうか邪推されちゃったりしちゃった？」

「お前全部聞いてたな！！　しらばっくれやがって！」

なぜか美優はとても嬉しそうな顔である。むかつく！

「あれ、付き合っていないんですか、残念」

「何が残念だ！　ど、どーして私があいつと付き合い合ねばならんのだ！」

「だってきつきの男の人——、貴女のこと話してましたもん」
「な」

固まった。あ、あいつ。どういうことだ。

「こういう可愛いものはあんまり好きじゃないですよね」近くの、美優が好きそうなマグカップを取って女店員は笑った。「もつと、なんというか。武骨っていうか。そういうのが好きなんだーって仰ってました。こんな店来て何言ってるのって思いましたけど、まあ、本気な感じでしたよ」

「ほ、本気って、なにが」

「そのままの意味でしょ。アカネちゃんの好みがなかなか分かってるじゃない、康孝君」

「う、うるさい」

確かに、好みについては、否定できないけど。

て、ていうか、なんだ。あの野郎。この店に来たのは自分の都合じゃなかったのか。今の話を聞く限り、まさか、私にプレゼントでも送るために来たってのか。あいつも金に困ってるのに。私の家で働いていたときともう状況は違うってのに。

「あ、ちなみに。もう一人の方は、可愛い感じが好きなんですよね」
「え」

「名前は伺ってないですけど、たぶん貴女のことだと思いますよ。ちようど今、お持ちになられているマグをお買い上げなさいました」
「む」美優は少しだけ顔を赤くした。「康孝君、いつの間に私の好きな

んか」

それを聞いて、店員はくすくすと笑っている。ふん、と美優は少し不満げな顔になっている。だが、私はそれどころの話ではなかった。

「……………アカネちゃん？」

ふつふつと、胸の奥底から湧いてくるこの感情は何だろう。

言うまでもない話である。これは怒りだ。あ、あの野郎。私にプレゼントだと。な、なにをふざけたことをしでかしてやがっているのか。

あいつはつまりわざわざ五千円を私と美優の為に使ったという話である。自分のことも顧みず。もうお嬢様でもない私に。なんとも大層な話ではないだろうか。大層すぎてとても腹が立ってきた！

「アカネちゃんとっても顔が真っ赤ね」

「あーそうだ。自分でもわかるくらいだね。なんでかわかるか？」

「…………？ 恥ずかしかつてるんじゃないの？」

「ちがう！ 私はな、怒っているのだ」

「怒ってる？」

きよとんとした顔に美優はなった。店員も同じような感じだった。

ま、まさか、私が何故怒っているのかわからないとでもいうのだろうか。

「あいつは私に言ったんだ。五千円を大事にしろってな。まあ、私のことを気にしてくれたんだろう。大層なことだし、それはいい。だけど、それを言った当の本人がプレゼントなんか金を使うとは、どういうことだ！」

「気にしてくれたんじゃないの？」

「気にしすぎだ！ そこまで考えてくれなくてもいい！」

「どうしたのアカネちゃん。情緒不安定？」

美優が酷いことを言った。が、気にしている余裕はない。

私は大変腹が立った。この思いをヤツにもやり返してやらねば気が済まない。ではどうするか？ それも決まっていた。

「みゆー。康孝に仕返しをするぞ」

「仕返し？ ……何するのよ。私、暴力的なことは嫌いよ」

「何を言ってる。私が殴ることしか考えていないとでも思っているのか？」

「思っているわよ」

「……………」

「……………」

思わぬ言葉が返ってきたので多少の沈黙が訪れる。

私は何とか気を取り直して、勢い良く言葉を続けた。

「目には目を、歯には歯をだ。私も格言くらいは知ってる。やられたことはそのままやり返すべきなのだ！」

「……………つまり？」

「そのままの意味だ——私も、あの男にプレゼントを買ってやる！」

ふん、と鼻息を荒くして私は勢いよく言った。

「……………そのなになが仕返しなの？」と美優がちよつと呆れた顔で言い、店員が私の勢いに押されたのか「お、おー」と謎の声を上げた。

それから、まア、色々あった。

私は異性にプレゼントを贈るのなんて初めてである。聞いてみたら美優もないらしかった。そんな二人にプレゼントを選ぶセンスがあるわけでもなく、無い知恵を必死に振り絞りながら考え、考え、考えに考えた結果、何も思いつかなかったのでさっきの店員に聞くことにした。ちなみにあの店員は彼氏持ちらしい。流石である。中々いいアドバイスを貰えた。

そんなわけで、私は準備を整えた。

顔を赤く、鼻息を荒くしながら、私は現在の住処に戻っていた。

ふう、と私は扉の前で一息つく。なんとも言えない気持ちだ。臨場感というか、緊迫感というか。喧嘩に行く前にも来た雰囲気か辺りを包んでいる。

「どーして立ち止まっているのよ」

「康孝になんて言えればいいのかな」

「素直にプレゼントをあげる、って言えればいいじゃない」

「それでは私がまるでプレゼントをあげたくてしようがないみたいじゃないか！」

「違うの？」

「違わなかった。」

だ、だけど、理由があるのだ。康孝が何もしなければ、私がこんな気持ちになることはなかった。仕掛けてきたのはあの男で、それに触発されて、私も気が変わったのだ。私からあげたくなったわけじゃない。

「あーもうじれったいわ。さっさと行くわよアカネちゃん」

「あ、ちよ、ま」

美優が勢い良く扉を開けた。開けてしまった。

どたどたと美優が足音を立てながら無遠慮に歩いて行き、おっかなびっくりという感じで私がその後ろに続く。いつもと逆だな、とそこでふと思った。

「あ——ああ、美優さん、お嬢様。どこか行ってらっしゃったんですか」

「ええ、ちよつとね。ほらアカネちゃん、なに私の後ろに隠れてるの」

「わ、わわ。急に押すなみゆー。乱暴な奴め」

私は美優に押し出されるような形で康孝と向かい合った。

「……………」

「……………」

気まずい沈黙が、辺りを包む。

な、なんだこの空気は。話しづらいし、妙に康孝に目を合わせづらい。

大体、康孝の奴め。よく部屋中を見回してみれば、端っこの方にプレゼントが無造作に置かれていた。あれで隠したつもりなのか。寧ろ自己主張しているみたいじゃないか。なんとも注意が散漫な奴だ。「あ」と、そこで康孝が私の視線に気づいた。

しまった。康孝のプレゼントを凝視しすぎてしまった。私が訝しんでいることに気づいたのか、彼はたはは、と笑っておずおずと口を開いた。

「もつと後で言おうかな、って思ってたんですけど、実はお二人に渡したいものがあるんです」

知ってる。

そう言いたくなる言葉を飲み込んで、私は黙ったままでいた。

「えと、僕、こういうの見繕うの初めてなんで、あんまり自信がないですけど……」

弱気なことを口にしながらも、康孝は二つの包装されたプレゼントを抱えて、私たちに差しだしてきた。「あ、ありがとう」と妙に照れくさそうに美優は笑っていたが、私はむっつりと黙り込んだままである。まア、くれるんだから、一応は受け取りはしたが。

「でも、どうしてこんなの買おうと思ったの？」

「この前、一緒にダンジョンに潜ってくれたじゃないですか。あの時美優さんはだいぶ怖かったと思いますし、お嬢様だつて嫌な思いをされていました。僕がこの中でダンジョンの経験が一番深いんだから、もう少しうまく立ち回らなきゃいけなかったな、って反省して。お詫びなんてことじゃないですけど、気持ちとして買ってきました。開けてみてください」

そこが、我慢の限界だった。

ダンジョンに一緒に潜ってくれた？ 違う。私が行きたいと駄々を捏ねたのだ。それに付き合う形で来てくれたのだから、美優に対してプレゼントを贈るのならばまだわかる。だが、私は貰う資格なんてないはずだ。

過保護な奴め。私は小さく溜息を吐いた。いつから康孝は私に対してこうも優しい奴だったのだろう。少し記憶を遡ってみたが、康孝は昔から康孝だった。最初からこうだったのかもしれないな、と思う。

「康孝」

「な、なんですか」

「健気な奴め」

私は手からぶら下げていた袋を、そのまま無造作に差し出した。「な、なんですか、これ」「知らん」「いや、知らんって」「開けてみる」

私は何故か意地になって、そんな、意味のない言動を繰り返してしまった。

「こ、これ——」

「プレゼントだ。私は別に気持ちとして買ってきたわけじゃない。お前に色々と面倒をかけてしまっているからな。その対価にはならないだろうが、できる限りのことをしたかった」

レジ袋の中には、私たちが見繕ったプレゼントが入っている。

美優が私の横腹を小突いてきた。「仕返しをするんじゃないの?」と、耳元で囁くように言ってくる。康孝が私に妙な優しさを向けることに怒ったのだから、同じことをしてやっただけだ。仕返しをしたことには変わりはない。ただ、その理屈を話すことが妙に気恥しく、億劫だったので「うるさい」と早口で返す。くすり、と隣で笑う声があった。

「お嬢様が、これを——?」

「違う。みゆーもだ。私が決めたんじゃない」

「そんなこと言いながら妙に真剣に考えてたわよね、アカネちゃん?」
「うるさい」

そっぽを向いて康孝と美優から視線を逸らした。

昔から、贈り物は上げる側に回ったことがなかった。だから、まあ、何というか、いい経験ではあったと思う。康孝め。その点では実によくやってくれたと言えよう。

「お嬢様……ありがとうございます」

「ふ、ふん。別にそんな高いものじゃない。どこにでもある湯呑みだ。お前の方こそなんだ、高い買い物をしたんじゃないのか」

私は康孝の贈り物を見る。

あの女店員は武骨、と言ったが、そこまで畏まったようなものではなかった。黒く輝くマグカップ。シンプルではあったが、持ち手の部分だけ少し赤く染まっている。

美優のものと見比べてみると、正反対だった。ピンク色で形どられて、中央には可愛らしい豚の絵が描かれている。他にもそこらかしこに装飾が施されていて、せわしない。私の好みとは真逆だ、と少しだ

け笑った。確かに、康孝は好みをよくわかっている。

「とりあえず、乾杯しましょうか」

「乾杯？」康孝と私の声が被った。

「お茶が冷蔵庫にあったでしょ。それで、乾杯。折角器があるんだから、使わないと損じゃない。なに、康孝君。その湯呑みを大事にしまっておくつもりだったの？」

「はい、そのつもりでした」

「し、正直に言うねえ……アカネちゃん今どんな気持ち？」

「馬鹿め、って気持ちだ。康孝、モノつてのは使ってこそ輝くんだぞ」

「じゃあ、お嬢様も僕が選んだマグカップを使ってくださいるんですか」

「……………む」

改まってそう言われると、なんだか妙に気恥しくなった。どうしてだろうか。よくわからない。

わからないが、たまにはこういうのも悪くないな、なんて思った。

「ああ使うさ。使うとも。おいみゅー、乾杯の音頭は私に取らせろよ」

「何よくわかんないこと言ってるの。こういうのはね、みんなで言うものなのよ」

「そーなのか。お、康孝気が利くな。もう注いでくれたのか」

「お嬢様の選んでくれた湯呑みを使いたいので」

「だ、だから私だけじゃなくてみゅーも選んだって！」

「あーもう面倒くさいわね。ちゃっちゃと乾杯しちゃうわよ」

「やんやんやと言い合い、少しの沈黙があり、私たち三人の目が合って。

「乾杯!!」

そんなはっちゃけた声が、妙に部屋中に響き渡った。

あかね「だんじよんのままのまものなど、わたしのてきではない」

「なア、みゅー」

「……なに、アカネちゃん」

「そろそろダンジョンに行ってみたくはないか？」

私が真面目な顔でそう言うと、美優は三流ホラー映画を見ている時みたいな顔になった。

「7回目よ」

「なにが？　ダンジョンに行きたいなっと思って思ったのがか？　意外だな。私もおんなじくらい今日思ってた気がするが……」

「今日私にそーやって言ってきた回数よ！　そりゃ数も一致するわ！」

「あれ、私そんなに言ってたっけ？」

てことはダンジョンに行きたくなる度私は美優に話しかけていたことになる。どんだけ行きたいんだ私。中々の精神力である。

「……ていうか、アカネちゃん。そんなに言ってたっけ、って。何度か私にダンジョンの勧誘をしていた自覚はあったってこと？　何度も断っているんだから諦めなさいよ」

「何度も言ったら最終的には受け入れてくれるかなーって。あれだ。サンマの霊だ」

「三顧の礼ね。……アカネちゃんにしては惜しい間違え方じゃない」

美優が呆れた顔で褒めてくれた。ちよっとうれしい。て、そうじゃない。ダンジョンだ。

「そんなわけで、私はダンジョンに行く。止めても無駄だぞ」

「私は行かないわよ」

「それは仕方ない。私だって無茶振りするつもりはないのだ。一人で行く」

「えー困るわ。それじゃこの何も無い家で一人じゃない。お化けとか出たら怖いわ」

「ちつとも信じていない癖によく言うもんだ!」

「そうね。アカネちゃんみたいに深夜にトイレに行きたくて起きちゃっても我慢したりはしてないわ」

「……そんなのしてない」

私はすぐにそっぽを向いた。触れられたくない問題というものはある。

「だったら康孝君が帰ってくるまで待つてよー。一人きりなんて寂しすぎるわ」

「あいつが帰ってきたら困る。ほぼ間違いなくあいつは私を止めてくる。だからこそ誰もいない間にちやちやと行っておきたいのだ」

「まあそうでしょうけどね、私が暇でしょうがなくなっちゃうじゃない」

「それなら一緒に行こう。退屈させないぞ」

「格好いいこと言ってくれてありがとうけどね、ダンジョンは怖いじゃない。あんなモンスターたちを見たくなんてないわ。それにアカネちゃん、たぶん一階で済ませる気がないでしょ」

「どーしてわかった」

「前のこと覚えたらだれでもわかるわよ。下に降りちゃったら大変よ。私が。戦闘民族のアカネちゃんはともかく、私は戦いなんて何もできないのよ。一階なら、まあ、アカネちゃんがゴブリンを瞬殺できるってことがわかったから大丈夫だけど、それより下は怖すぎるわ」

「む」私は自分の眉に力が入るのを感じる。「むむむ……じゃあ一階だけがいい」

ふ、と美優は鼻で笑った。何もかもお見通し、と言わんばかりの嫌な顔だ。

「アカネちゃんがね、一階で済ませられるわけがないでしょ」

「どーしてー!」

「長い付き合いなんだからね、性格なんてお見通しなの」

「むう……頼むよお、みゅー。ホント。ホントに一階だけだから」

「わ、わわ。抱き着いてこないで頂戴。アカネチャン暑苦しいんだから……」

「一階！一階だけだから!!」

「何回言うのよ。いい加減、うんざりして……き、たわ……」

後半から声がか細くなっていた。む？ と美優の顔を窺う。力が強すぎた？ や、そんなことはないはずだ。私だって加減はわかっている。

じゃあ何だ、と彼女の瞳を見る。動揺した感じ。私の後ろに注がれている。その視線に合わせて、私も同じ方を見つめ――

「――あ、あのお、僕、まだ帰ってこないほうが良かったですかね？」
康孝がいた。

「べ、別にそんなことはないわ！ ほら、アカネちゃん離れなさい！」
前もこんなやり取りあったなあ、と思いながら私は美優から引き剥がされた。

「で、どこから聞いてたの、康孝君」

『むむむ……じゃあ一階だけでいい』から、聞いてました」

「最悪のどこじやん！ アカネチャンの真似も似てないし！」

「康孝お前次その真似したら怒るからな。ブチギレだかん」

私が指をばきばき鳴らしてみると、康孝はだいぶ焦った様子を見せた。

「そ、それなら、何の話だったんですかつ」

「あ？ 一つしかないだろう。ダンジョンだよ」

「……アカネちゃんがね、もつと下の階層まで行きたいとかほざいてるのよ。やばいのよ。戦闘狂過ぎるの」

「何を言ってる。私だって無茶をしたいわけじゃない。もう一個下の階層がどんな感じかは、昨日インターネットを見た」

「……？ あれ、アカネちゃんどうやってネットを使ったの」

「近くの公園で待ち伏せてな、スマホを貸してくれるよう通行人に強請ったんだ。中々貸してくれなくて十人くらいに聞いた結果、優しい

中学生くらいの子がよーやく貸してくれた」

「……通報されなくてよかったわね」

何故か生暖かい目で美優から見られた。気にしない。

「見た結果、あの程度ならどーとでもなると思ったわけだ。私の力はハッキリ言っただけだ。あんなのに負けるほどヤワじゃない」

「……モンスターみたいなのと戦うんでしょ？ どうしてそんな余裕なの」

「別に。そもそも私、元勇者だし。男だし。本職みたいなものだからな！」

美優は私から目を逸らして、康孝の方を見た。「なんとかして！」と助けを求めている感じだった。私だっただけだ。わかるんだからな。

私も康孝の方を威嚇する感じで見したが、彼は小さく溜息を吐くだけでいつも通りだった。それどころか「そろそろ言うんじゃないかって思いました」なんて呟くように言っただけで、私の方をじっと見てきた。

「な、なんだよ」

「行きましよう」

「どこにだよ」

「ダンジョンですよ。下の階層に行きたいんでしょう？」

「まじか！」

なんだと。康孝がこんなことを言ってくるなんて。

驚きのあまり私は思いつき康孝の手を掴んでしまった。「あ、あ」と何故か彼が妙な顔でもりを見せる。美優がため息を吐くのが横目に見えた。

「……でも、いいの康孝君？ 危ないじゃない」

「だ、大丈夫です。今日ちょっと友達と話したんですよ。ダンジョンに潜る仲間を募集したいって。それでお嬢様のことを話したら興味を持たれちゃって。明日一緒に行くことになったんです」

「それって女の子？」

「話した時はまあまあ大勢いましたけど、興味を持ったのは女の子二

人でした」

「ふうん」

「いいじゃないか!」

いい。実にいい。別に男だろうが女だろうがどちらでもいい。ただダンジョンに仲間と向かう、というのは中々面白そうだ。

「でも危なくないの。大丈夫?」

「大丈夫です。以前はお嬢様と美優さんのお二人を僕一人で見守るのは不安だったんですけど、他に経験者が二人もいれば大丈夫です」

「お、康孝。随分と上から視線じゃないか。私はなんだ。要介護者か」「ていうか康孝君の中では私はメンバーの中に入ってるの? 全然行く気がないんだけど」

私と美優から鋭い視線が向けられて、康孝はだいぶ焦った様子だった。す、と私は視線を背ける。視界の外で康孝と美優が言い争う声が聞こえたが、無視だ。どーせ美優はついてこない。それよりも明日、ダンジョンを踏破することを考えると、居ても立っても居られなくなってきた。大変楽しみである。

あかね「やすたかのゆうじんたちが、とうじょうした」

翌日。

私は康隆に案内されて、ダンジョンへ再び赴いていた。午前十一時。楽しすぎて朝の四時から起きていた私は、今現在、まあまあ眠い。康隆の背中をちんまり掴みながら歩いていると、何故か同行している美優に生暖かい目で見られた。よくわからん。

まあ、そんなわけで着いた。ダンジョンの入り口の前に、鎧みたいなものを見に纏った少女が二人いたので、私はまあまあ驚いた。鎧である。この現代日本において。勇者だった頃の記憶が蘇るものだ。

そんな彼女たちの片割れから、「小出さん」と声がした。小出？ 私は誰に向けて声をかけたのかわからなくて、美優と顔を見合わせて首を捻った。「小出」「小出」とお互いに呼び合ってみたが、当然、私たちは小出ではない。おっかなびっくりといった様子で康隆の方を見ると、彼は少し不満げな様子で私たちを見ていた。

「お嬢様……僕の苗字をご存知なかったのですか」

「小出って康隆のことか！」

「ご存知なかったんですね」

「康隆は康隆だ。それ以外にない」

腕を組んでそう言うのと、康隆に半目で見られた。な、なんだよ。焦って美優の方を見るも彼女も同じ顔をしている。こ、こいつ！ 自分もわかんなかったくせに！

「だ、大体、親しい仲といえどもわからないことはあるものだろう」

「苗字は普通忘れないけどね」

「うるさいみゆー。そうだ。康隆、お前だってそんな私のことは覚えていないはずだ。お前に私の誕生日がわかるか？あの家で祝う習慣だってなくなっただからもう覚えてなんて」

「2月18日です」

「……なんで覚えてるんだ！」

私は頭を抱えた。こ、こいつめ！ 妙な記憶力がいいやつである。

当然のような顔をする康隆を見て、私は顔が赤くなるのを感じた。恥ずかしい。これじゃまるで私だけが馬鹿みたいじゃないか。いや、実際そうなんだけど、なんともいえない敗北感がある。

こうなったら、康隆の知らない私のことを見つけ出さねば。

「康隆。私と初めて出会ったとき、私は何歳だったかわかるか」

「10歳ですね」

「……そのとき私の趣味はなんだった？」

「喧嘩でした。今も変わりませんね」

「……そのときの私は何が嫌いだった？」

「トマトとブロツコリーですね。あ、食べ物の話じゃなかったですか。それならお化けとか」

「私はそんなのこわくない。こわかったこともない。嘘だ。捏造だ」

「大当たりじゃないのアカネちゃん。アカネちゃんの怖がる様子が目に浮かぶわ」

「テキトーなこと言いやがって！ もういい。もういいぞ康孝！ 私とみゆーはその子たちと初対面なんだから、自己紹介したい」

強引に話を逸らした。美優がちよつとこつちを見てきたが無視する。

康孝の後ろに、鎧を身に纏った女の子が二人いた。金髪の、ちよつとはつちやけてそうな感じの子と、黒髪の、図書室で本とか読んでそうな子。まあまあ対照的だった。

「えと……こつちから自己紹介すればいい感じ？」

「ああ。頼む」

金髪の少女が窺うようにこちらを見ながら言った。ので、とりあえず頷く。

「あたしが麻上で、そつちの不愛想なのが井瀬」

「私が茜で、そつちの腹黒いのがみゆーだ」

「なに、いきなり名前なわけ？」

「嫌か？」

「や、寧ろ好き」

そう言うのと、金髪——麻上はにっこりと笑った。可愛い様子

だった。

「ね、ね。あんたも名前前で問題ないよね？」

「好きにして……」

「だってさ。あたしの名前は新菜にいなで、井瀬はさら。これからそう呼んでー」

「ういうい。新菜、それにしてもお前随分とすごい鎧だな」

「普通よ、普通。寧ろ、茜はそのままで行くわけ？」

「とーぜんだ。動きづらいからな」

「まー一階だったら大丈夫かなあ。最悪、康孝クンに守ってもらえばいいしね」

「おいおいおい。何言ってるんだ。自分の身は自分で守れる。むしろ逆だ。私は守る側だ」

「あんた、凄い余裕だねえ」

呆れたように言われて、だいぶムカついた。怒ってます、と表現するように頬を膨らませると、彼女は首を横に倒した。私のボディランゲージは意味をなさなかつたらしい。がっかり。

「挨拶は終わった」

「ん。終わったぞみゅー」

「それじゃ、私は帰るね」

「な！ 一緒に行かないのか」

「あのね、私は最初の階層でもダメだったのよ。もう一階なんて行けるわけないじゃない。アカネちゃんはどうしてもって言うからついてきてあげたけど、どんな人たちと一緒に行くか見たかっただけなのよ。安心できそうな人たちだから私はもう帰るわね」

「む、むう……」

「今日の夜ご飯はカレーにしてあげるから早く帰って来なさいよ。康孝君もね」

そう言うや否や、美優は普通に帰っていった。マイペースである。マイペース過ぎる。てかあいつ料理できるようになったの？

私と康孝は顔を見合わせた。まア、正直、仕方のないことだ。ダンジョンに行きたいと駄々を捏ねているのは私だ。それに美優を無理

に付き合わせるといふのも、なんだ、目覚めが悪いというか。行きたくないのなら行かなくてもいいのだ。でも、あいつ大丈夫かな。だいぶ暇なんじゃないかな。私はそんなことを考え、もういない美優のことを少し心配してみる。

「ね、ね、茜と康孝クンってどういうカンケイなの？」

「む……どういふ関係か。難しい話だな」

「はぐらかさないでよ」

「はぐらかしてない。まア、答えるのもやぶさかではないが、先にお前たちの関係を教えてくれ」

「あたしとさらの？」

「ああ」

そんな風にガールズトークをしていると、前からちらちらと康孝の視線が飛んできた。無視だ、無視。女の会話に都合よく入ってこようとするんじゃない。

そう考えながら、あれ、と私は思う。今、自然に自分を女にカテゴリリしていた。違う。違うぞ。私は男だ。でもまア、こういう会話をする時には都合よく女になってもいいよな。もしかしたら一番都合のいいのは私かもしれない。ちよつと反省する。

「ねえ、さら。あたしたちってどんなカンケイ？」

「幼馴染」

「うーん。他には？」

「生徒会役員関係者」

「それはさらだけじゃないの。あたしは？」

「よく先生に怒られて指導室に行ってるし、関係者みたいなもの……」

「う、うーん？ まあいいや。あたしとさらは普通に友達よ、友達で、茜は？」

「主従だ」

「シユジユウ？」

うむ、と私は頷く。しゅじゅう。それを上手く漢字変換ができない

のか、新菜は首を傾げ、ちよつと考えてようやく理解したようだった。「主従?」「そう。主従」私は自分を「主」で指差し、「従」で康孝を指差した。へえ、と彼女は悪戯っぽく笑う。

「康孝くん、そういうカンケイだったのね。いやらしい」

「なにがですか。変な関係ではないでしょう」

「そうかな。てか、主従って、どこでそんなカンケイになれるわけ?」

「お嬢様なんですよ、アカネさんは」

改めて言われると、なんだか照れた。ていうかこいつに名前と呼ばれるの、なんかヘンな感じだ。悪いわけじゃない。悪いわけじゃないが、何というか、こう、胸がもよもよする。これが恋なのか。違う。多分そうじゃない。

「どうしてそんなお嬢様がダンジョンなんかに来てるのよ?」

「あー……その、それは」

「没落したからな、うち」

言いつらそうにする康孝が変わって何気なく言った。潰れたものは潰れたのだ。盛んなものもいずれば盛んじゃなくなる。なんかそんな昔の言葉があつた気がした。多分、今さりげなくそれを言えたら格好いいのだろうが、残念ながら、私とその言葉を思い出すことはなかった。何だっけなー、中学の国語の授業で聞いたことあつた気がしたんだけどなー。

「え、じゃあもうお嬢様じゃないの」

「まア、そうだな」

「それじゃ、もう主従じゃないんじゃないの?」

「む」

私は首を傾げた。あれ。あつれー。確かにそうだ。そうじゃん。

私はもう主じゃないのか?」

「お嬢様じゃなくなつて、今どうやって暮らしてるの?」

「部屋を借りてな、そこで住んでる」

「アルバイトとかしてるわけ?」

「……いや、してない」

「んじゃどうやって家賃とか払ってるのよ」

「……………」

私は無言で康孝の方を指差した。あ、改めて言われるとまあまあ恥ずかしい。あくまで、今は、康孝の力を借りているのである。私だつてあれだ。ダンジョンに潜り慣れてこれば自力でお金を稼げるはずだ。

「えー、だらしがない」

「だ、だらしがないのか私は」

「超だらしがないよ。だって逆じゃない。主がお金を上げて、従がそれに応えるものでしょ。茜が応えているのかは知らないけど、それなら茜が従で康孝クンが主よ」

「な、な——！」

とんでもない理屈だった。でもまあ、確かにそうだ。私は今、康孝に何もしてあげていない。それを主と言つてもいいものだろうか。いや、ダメだ。確かにだらしがない。超だらしがないぞ、私。

「なーじゃないよ。ほら、従なんだから康孝クンになんか言つてあげなさい」

「や、康孝……いつもありがとう」

「従は主にそんな生意気な口で話さないけどねえー」

「や、康孝さま、いつもありがとうございます……」

「何言わせてんですか新菜さん！」

康孝がなんか新菜に食つてかかっていたが、私はそれどころじゃなかった。

く、苦しい。康孝に敬語を使うのが苦しい。何だこの感情は。わからない。わからないが、絶対に恋じゃないことは確かだった。ちよつと涙目になりながら、正直に康孝に向けて言う。

「な、なア康孝、私さつきみたいなの喋り方ですつといた方がいいのか？

だいぶ辛くて死にたくなるんだが。これが庶民なのか。私は今まで上流階級に浸り過ぎていたのか、康孝。いや、康孝さま

「余計なことを考えなくていいです！ 今まで通りでいてください！

新菜さんもお嬢様に変なことを教え込まないでください！」

けらけらと新菜は笑っていた。完全に楽しんでる感じだった。と

んでもない奴である。

あかね「はじめての、せんとうである」

そんなわけで、ダンジョンに入った。

地下一階に辿り着くまでにゴブリンに纏わり付かれて、二、三体投げ飛ばすことになってしまったのだが、割愛させていただく。まあ、幸い、今回はスカートが破れることもなかった。今の私は衣服にも金を使えないご身分である。

にしても、いったいゴブリンの連中はどーなってるのか。どうして私を狙ってくる。他のやつは見向きもしないとはどういうことだ。

それを素直に三人に尋ねてみたが、満足のいく回答は得られなかった。新奈の馬鹿が「胸が大きいからじゃない？」という馬鹿極まりない発言をしていたので、軽く頭を叩いてやった。なんの関係があるのだ、なんの。

「案外すんなり行けたもんだな」

「まあ、ただ下に降りるだけだったらそんな時間はかからないよ。メモ取りながらとかだと面倒だけどね」

「そーいうことか。通りで康隆がメモ帳を持ってないわけだ」

「そうですね。今日はモンスターの討伐が主です」

「ほお、討伐」

中々いい言葉じゃないか。私は指を強く押し、音を立てて鳴らそうとしたが、ぐにやぐにや曲がるだけで鳴らなかった。く、くそお。なんとも締まらない。

「茜、本当に大丈夫なわけ？怖いよモンスターって。食べられちゃうかもしれないよ?」

「おもしろいな」

「余裕ぶっちゃって」

「危なくなったらすぐに逃げた方がいい……」

「む。新奈もさーらも私を舐めてるな」

「そりゃ舐めるよ。べろんべろんだよ。なんの防具もなしにここに来ちゃ普通ダメだよ」

「康隆も着てないだろ」

「あれはあーいう服なの。一種の防具」

「あの普段着みたいなのやつか？」

「着る防具的な感じのね。ちよつと昔のだけどさ」

初耳だった。何だその着る毛布みたいなもの。

私は康隆の方を見ると、彼は言い訳するように「昔からダンジョンに潜っていたので……」と小さく言った。

しかし、着る防具か。なんとも素晴らしい発明品である。私も欲しいな。これ終わったら買ってみようかな。何円くらいなんだろう。ちなみに私の残金は四百円くらいである。それ以内で収まることとありえないだろーか。ないな。

「ほら、康隆クンも教えてあげなよー」

「いやあ、お嬢様は、そのお……」

「言いつらいの？ご主人様だから？」

「まあ、それもあるんですけど……」

なんともまア歯切れの悪い返事である。なんだ。何をいうつもりなのだ。新奈だけでなく私も彼を見つめる。

2つの方向から視線を飛ばされ、康孝はだいぶ焦った感じになった。ちよつと黙り込み、目を泳がせながら、それでも、と気合を入れたように口を開いた。

「お嬢様は、なんだかんだで強いですから。大丈夫だと思いますよ」

ぱちぱち、と新奈は目を瞬かせた。

私も同じような感じである。う、うむ。そうだ。私は強い。だけどなんだ。そんな素直に言われると戸惑ってしまう。や、康隆め。最近変に素直になりやがって。

そんなこんなで、地下一階。

確かに新奈が言いたいことは、降りた段階でわかった。上とは雰囲気が違う。多分、ここから先はそれなりに命の危険があるはずだ。鎧をつけないと危ない、というのは、嫌味でもなんでもなく純粋な心配

だったのだろう。

「雰囲気が変わりましたね」

「ああ、そうだな。康隆、お前は地下一階によく来てるのか」

「そうですね。前みたいなのメモ取り依頼以外は、大抵地下一階までは来てます」

「ちなみに地下何階まで潜ったことがあるんだ？」

「四階ですね。多分、今でもそこまでなら行けると思っていますよ」

「ほお」

中々の自信である。

私も、ダンジョンのことはそれなりに調べた。家の近くの公園付近で遊んでる子供（小学生）と友達になることによって、私はネット環境を疑的に使えるようになりつつある。ちよつと情けなくはあるが、仕方がない。仕方がない話なのである。

その情報から、ダンジョンが大体十から二十の階層に分かれていることと、下に行けば行くほど強くなることは理解できている。そして、並の人間ならば地下二階を越えるくらいは怖くなくなるらしい。

それを康隆は四階までは余裕だという。まあ、確かに昔からこいつは腕っ節は中々だった。それでも私には及ばなかったがな！

「康隆くんはだいぶ凄いよ。あたしとさらは一階より下に行ったことないし」

「そーなのか」

「ていうか、二階より下はほぼ人いないもん。危険だから」

まあ、前情報通りである。普通の人間はこの階層が限界。ダンジョンの奥深くに行けるのは限られた人間だけ。

ふふん、と私は鼻を鳴らした。なんか頭が馬鹿になっている。不思議な高揚感と興奮で体が火照ってきて、妙な気分だ。最近、喧嘩してなかったもんな。別に殴り合いが好きだとか、そんな暴力的なことを言うつもりはないけど、こつも期間が開くとどうしてもダメになる。

「康隆、なんか手頃な奴はいないのか」

「て、手頃って」

「ぶん殴れる奴ならなんでもいい」

「いくらお嬢様でも、最初は僕や他の二人の戦いを見てからのがよろしいですよ。今は余裕でも、実際にモンスターと目があつたら動けなくなる人もいるんです。慎重に、穏やかにいきましよう!」

康隆は妙にニコニコとしながらそう言った。幼稚園児に話しかけるみたいな感じだった。ひよつとしたら彼は私のことを馬鹿にしているのかもしれない。

康隆は無視して、辺りを見回す。何も無い。何もいない。そう一瞬思い、いや違う、と思い直した。微かな音が聞こえる。

足音だった。ずしん、ずしんと響くような音。新奈とさらの顔色が変わる。遂に来たわけだ。康隆が何か言った。たぶん、「下がってる」だとか「見ている」だとか、そんな言葉だったのだろうと思う。でも、私は聞いちやいなかった。聞いている余裕なんてなかった!

「見つけたあああ!」

「お嬢様あーっ!?!」

ダツシュ。

全力である。

走ってる最中で色々考えた。たぶん、このモンスターをぶん殴った後、康孝に怒られるんだろう。康隆は怒ると怖い。雰囲気怖い。滅多にビビらないことに定評のある私からしても、中々の威圧感である。怒られるのは嫌だなア、と素直に思った。

でも、仕方がない。仕方がないのである! モンスターと目があつた。狼と猪のあいこのこみたいな雰囲気だった。私の方を見て吠えた。敵と認識したらしい。それだけで、興奮する。

掌を握り込み、化け物が殴りかかってくるのを躲す。体格は向こうのほうが少し大きいだけ。いつもと、男と喧嘩してた時と、明確な違いなんて何もない。私にできることはただの一つだけ。いつものように、私は目を見開いて全力で叫んだ!!

「茜え、パンチい!!!」

茜パンチ。相手は死ぬ。

それは大袈裟じゃなかった。本気の本気。手加減など一切せずに

殴り抜いた結果、化物はロケットみたいに錐揉み回転で吹き飛び、壁にぶち当たって動かなくなった。

これは、いつも通りじゃなかった。喧嘩とは違う。相手のことを全く顧みず、本気で殴ったことは今までなかった。死ぬかもしれない。そう考えると、やはり身体のどこかがブレーキになってしまっていたのだろう。それを何も考えずに殴った。だから、今までとは違う。

手に嫌な感覚が残った。すぐに消えた。まア、気にすることじゃない。元勇者だぞ、元勇者。ステゴロで戦う勇者なんて聞いたことないけどもさ。

「……………」

「な、ナンダヨ、康隆。勝ったぞ。勝利だ。ぶい」

やっぱり康隆は怒っていた。だ、だよな。こえーよ。私が珍しくかわいこぶって、頬に指をくつつけながら「ぶい」ってやってあげたのに、無反応だもん。笑うなりなんなりリアクションが欲しかったところである。

「茜さん」

「あ、はい。康隆さん」

「慎重にって言いましたよね？」

「ちよつと聞こえませんでした」

「絶対、聞こえてましたよね？」

康隆が私のことを名前と呼んだ。これはかなりキレてる証である。私はすぐに彼から目を逸らし、とにかく言い訳をする態勢を取った。彼は優しいので、本気でキレても数分したら許してくれるのである。台風が過ぎ去ってくれるのをただただ待つような感じで、彼が落ち着くまで耐え凌ぐしかない。

ちなみにこの凌ぎ方は美優が見つけた。それから彼女は康孝を怒らせる度にこの方法を使って逃げ続けていた。なんともまあ悪い奴ではあるが、今の私は文句を言える立場ではないらかった。文句を言うどころか、その方法を活用する立場である。

「まア、康隆……私も心配されるほどじゃないことはわかっただろ？」
「それはそうですけど」

「次はやらないからな。康隆たちがどんだけ強いのかみてみたいし」
そう言い、新奈とさらの方を見る。向こうも私の方を見てきており、目があった。呆然としてる感じ。む、むう。なんか気恥ずかしいな。

「ど、どーだ。なかなかすごいだろ」

「……茜って、格闘技とかやってたの？」

「やってない。喧嘩しかしたことないし」

「……………ひよつとして、めっちゃ強い？」

「ひよつとしなくても、私はめっちゃ強い」

ふんす、と胸を張る。

まア、だけど、ちよつとだけ安心した。正直な話、ダンジョンの化け物なんて戦うのが初めてだったから、緊張はしていたのである。私のパンチが通用するかなーとか、考えちやったりはした。やってみて、とりあえずはいけそうな気になった。それは事実である。

「なんでお嬢様が喧嘩ばかりしていたの？」

「私が特別だったからかな？」

「……………それ、理由になつてくかない？」

「確かに、なつてないかもしれない」

適当に言葉を返す。私が喧嘩が好きな理由？ そりゃ前世が男だったからだ。けどまア、今ここで言う感じの空気じゃない。多分康孝もそーいうこと人前で言つてほしくないだろうし、自重する。

「……………ひよつとして、貴女って、附属中の巨爾羅？」

「む、な、懐かしいあだ名だな。久しぶりに聞いたぞそれ」

「なに、そのゴジラって」

「凄い暴れん坊が附属のお金持ち学校にいる、って話が中学の頃にあって、そのあだ名」

さらが妙に冷静な顔で言った。

懐かしい話である。中学の頃の私は荒れていたらしい。正直、高校に入ってからと大して変わっていないような気もするし、確かに今よりは凶暴だった気もする。あんまり覚えていないというのが本音だった。

「……お嬢様、そんな感じだったんですね」

「ま、まア、そうだな。みゆーに聞けばもつと詳しく教えてくれるかな」

「今度聞いてみます。でも、なんでゴジラなんですか？」

「強そうだからな」

「それ、ひよつとしてお嬢様が自分でつけたんですか？」

「……どーだったかなあ。覚えてないな」

私がつけたのである。理由は格好いいから。

今考えなおしてみるとだいたいぶダサイな。当て字のセンスがない。そもそもセンスがあつたとしてもこんな風に名乗っちゃうのはちよつとやばいかもしれない。若気の至りだ。若気の。

「でもまあ、安心だね。茜を守りながら行くことになるかなーって思ったけど、そんなことはなさそう」

「当たり前だ。私が守ってやってもいいぞ。みゆーで慣れてるし」

「あたしたちだってここくらいなら自力で行けるよ。この一個下なら、たまに康孝クンに守ってもらうけど」

「む。そうなのか、康孝」

「え、ええ、まあ。だ、ダメでしたか？」

「なにがだよ。健気な奴め、って思っただけだ」

寧ろよくやるものだ、と感心したのである。なにがだめなんだ、なにが。

新菜はにやにやとよくわからない笑みを浮かべている。

「ふうん。嫉妬してるか心配だったんじゃない？」

「なににだよ。わけわかんないこと言いやがって」

「わかんないならいいけどさ。あ、そうだ、ねえ」

「なんだよ」

「茜じゃなくてこれから巨爾羅ゴジラって呼んだ方がいい？」

「いーわけないだろ！」

どー考えたらそっちの方で呼んだ方がいいと思うんだ！

あかね「せんとうというものは、はじめてである」

ダンジョン探索は、まあまあ疲れた。豚みたいなヤツ、蛙みたいなヤツ、魚と人間を掛け合わせたみたいなの。多分、虫とか生ものが無理なタイプは、このダンジョンに潜れないだろう。私も凄いい好きなのじゃないが、苦手だったこともない。これくらいなら耐えられる。

……ただ、骸骨みたいなヤツが急に地面から出てきたときは、かなり驚いた。「きゃっ」とか言ってしまった。だいぶ恥ずかしかったが、さらにも新菜もそれなりに驚いていたので、誤魔化せたらしい。あのような醜態は二度と晒さないようにしなければならぬ。

と、いうわけで。

銭湯に行くことになった。

「……なあ、新菜。さら」

「なによ」

「なに」

「どーして、私たちは銭湯に行くことになったんだ？」

私は仏頂面でそう呟くように言った。

新菜もさらも当たり前のように行動し、康孝だってそれに従っていたので、私も流されていたのだが、よく考えてみるとわからなかった。どーしてダンジョンから帰ってきたら銭湯に行くんだ？　そういうしきたりでもあるのか。

「だって、ダンジョンってまあまあ臭いじゃない」

「まあ、確かにそうかもな」

「身体全身を洗い流せるのなんて、銭湯くらいしかないでしょ？」

「家の風呂じゃ、駄目なのか？」

「それはフゼイがないじゃない」

風情。一瞬脳内で変換に時間がかかってしまった。ええと、あれだ

よな。なんかいい感じみたいの意味だよな。でも、言うほど銭湯って風情があるか？

ただ、見るからに賢そうなさらが二度三度と領いているので、まあそうなんだろうなと納得した。

「ねえ、お嬢様」

「なんだ」

「銭湯に来たことってあるの？」

新菜が目をぱちぱちさせながら聞いてきた。

「いや、初めてだ。作法もわからない」

「へえ……まあ、そんな難しくないよ」

「それはなによりだ。で、なんだ。男と女は別々に入るものなのか、ここ」

「………そこから説明が必要なの？ 普段はどーしてるのよ」

「一人で入るからな。複数人で入る場合の勝手がわからん」

前世のことを思い返す。もうだいたい忘れちゃったけど、あんどきはみんなで一緒に入ってた気がする。でもまあそうだよな。男と女は分かれて入るべきだよな。うん。

「まずはその券売機で、お風呂のチケットを買うの」

「タオル付きつてヤツか？」

「そうそう」

「む」私は小さく唸った。「康孝はどこだ？」

「いや、だから康孝くんはもう男湯に行ったわよ。別々なんだから」

「いや、そうじゃなくて。私、こんなにお金持ってないぞ」

私は康孝から貰ったなんか地方のお婆ちゃんが使ってたそうながま口を開いて、気づいた。

四百円くらい入ってるかなあ、と思ってたら、占めて三百六十二円。銭湯代の八百円にはちょうど二倍くらい足んない。

「茜、本当に苦労してるのね」

「うむ。かなり苦労してるぞ」

「……その割に悲壮感がないのがすごい」

「貧乏になったところでそこまでの不都合はないからな。まあたまに

カルチャーショックを受けたりするがな」

そう言つて、「ああ」と思い直す。「今から一緒に風呂に入れないのは、中々不都合だな」と、ちよつとだけ残念になつたので、呟く。「どーする気?」

「好きに入つて来い。私はあそのゲーセンにいる小学生と一緒に遊んでる」

「通報されるよ! もー、お金がないんなら別にいいのに」
「?」

「……私たちで、それくらい払つてあげる」

さらがそんなことを当り前みたいに言つと、新菜も頷いた。

「ほんとか? そーしてくれろと滅茶苦茶助かるんだが」

「出世払いよ。茜の家が復興したら十倍で返してね」

「うむ。たぶん無理だけど一応頷いておこう」

「でも、お金そんなに持つてないの?」

「ついこないだダンジョンに潜つた時に五千円くらいは入つたんだがな」

「それ、どうしたの」

こくん、と首を倒して新菜に聞かれる。

私はちよつと困つた。言いたくない。なんか気恥ずかしい。

「いや……その使つてしまった」

「お嬢様ね。で何に使つたの?」

「いや……それは、その、な?」

「……何に、使つたの?」

何故かさらも興味深々な感じだった。

二つの目に囲まれて、私は諦めた。まあ、銭湯もおごつてもらわない。隠し事をするのも申し訳ない。そもそもなんだ、大したことじゃない。恥ずかしがるようなことでもないのだ。

「プレゼントを買うために使つた」

「へえ。何を買つたの?」

「マグカップ」

「誰にあげたの」

「康孝」

素直に私がそう言うと、「へえ」と無表情でさらが言い、「へえ！」と興味津々な感じで新菜が言った。正反対な奴らめ。

「どうしてあげたの？」

「あいつがな、生意気にも私にプレゼントを渡して来ようとしたんだ。だから、私とみゆーで仕返しにプレゼントを贈り返してやることにした」

「何の仕返しにもなっていない気がするけど……」

「まア、それで金がなくなってしまうたわけだ」

「そんないいやつあげたんだー」

「ふ、普通だよ。みゆーと二人で割ったしな」

「二人で割ってお金が無くなるってことは、だいたいやつなんじゃないの？」

「それはともかくだ。銭湯に行こう。ここで話しても周りの迷惑だしな、うん」

私は二人を引きずって銭湯に向かった。さらは素直に引きずられたが、新菜は「教えて教えて」ともがいていやがる。し、しつこい奴め。私は無視してよくわからないまま銭湯の入り口みたいのところに入ってしまった。

「茜って、胸大きいのねー」

風呂に入っただけの第一声がそれだったので、私は赤面した。まったく、美優と言ひ、女の方がこういう発言を気軽にしてくるので怖い。康孝をちつとは見習ってほしいものである。

「ま、まア、確かにそうだな。お前らよりかはデカイ」

「あたしは今くらいがちょうどいいからいいけどねー」
「……………」

さらはできの悪い人形みたいな顔になった。だいぶ気にしているらしかった。確かに、まじまじと見てみると美優よりない。これは相当だ。たいへんである。

「別に、気にすることでもないぞ。あってもいいことなんざないに等

しい。戦うのに邪魔だし」

「……………そう思うんならわけてほしい」

「そういう技術が発展したら考えてやろう。……………しかし、銭湯とはなかなかいいな。初めて入ったが、開放感がある」

「昔の豪邸だったら、これくらい大きなお風呂はあったんじゃないの？」

「あっても入るのが私だけじゃ、開放感も何もないだろ。ただ寂しいだけだ」

「あるにはあったのかあ……………」

ぶるじよあね、と新菜が言った。意味がわかんなかったので、曖昧な笑みを返しておく。

「でも、茜って昔から喧嘩ばっかしてたの？」

「そーだな。物心つく頃からそうだった」

「勉強とか部活もしないで？」

「戦闘に次ぐ戦闘だったな。銭湯だけに」

滑るかな、って思ってたなら案の定新菜は仏頂面になった。さらは笑ってくれた。愛想笑いかな、と思ってみてみると意外と本気で笑ってる感じだった。こんなつまらないギャグでそこまで笑われると逆に困ってしまう。

「……………でも、だったら微妙だったなあ。もしかしたらさらと茜が喧嘩してたかもね」

「あ？　なんで」

「さら、意外と武闘派だったでしょ」

「……………別に？」

「どこが。不良とよく喧嘩してたじゃないの」

「取り締まってただけ」

さらは淡々と言った。

「そーいや、生徒会だか何だかやってる、って言ってたな。」

「中学の時も生徒会長だったのか」

「うん。昔から、ずっと」

「さらは頭いいし、運動もできるし、喧嘩もできるからねえ」

「喧嘩が強い奴が生徒会長になるイメージは別ないけどな」

「……昔、附属中の巨爾羅^{ゴジラ}を倒しに行く、つてのについていったことはあつたよ」

「へえー！ なんだ、私と戦ったのか？」

「いや。結局巨爾羅^{ゴジラ}には会えなかった」

「そーなのか。……あと私のことをその名前で呼ぶのは止めろ。恥ずかしい」

そーなの、格好いいのに、とさらには首を傾げた。

ギャグのセンスしかり、やはり彼女はどこかピントがずれているらしかつた。私は温泉に顔の下半分までつかりながらぶくぶくやっていた。快適。

「で、茜は今康孝クンと一緒に生活してるんだよね」

「ああ、そうだな」

「なにもないの？」

「なにはあるんだ」

「いやらしいコト」

ぶは、と口からお湯を吐き出した。

「あによ、汚いなあ」

「な、なにを急に——！ ちよつとお湯飲んじやつたじゃんか！」

「別にヘンなこと聞いたわけじゃないでしょ。茜と康孝クンのカンケイが気になったんだもん」

「十二分に変だ！ だ、だれが康孝とそんな関係になるか！」

「えーなつてないのおー。フシギー」

「普通だ！ 大体、うちにはみゆーもいる三人暮らしだ。そんなことは起きん！」

とんでもない話である。

康孝とは旧い付き合いである。もう何年も主従としてやつてるのだから、その関係性なんてそうそう変わるもんじゃない。あいつだつて、私なんかよりもここの新菜だとかさらだとかと付き合った方が……。

そこまで考えて、うーん、と思つた。あれ、微妙だ。なんでだろう。

素直に喜べないかもしれない。どうしてだ。私はよくわからなくなってきたので、素直に思考を放棄した。こういう時は考えるのをやめるに限る。余計なことは考えない方が自分の為である。

「それなら、さっきの美優って子が康孝クンと付き合ってるかもよ？」
「む」

「狭い密室に男女二人なら何があるかわかんないもんね」

「……新菜、正確にはアカネもいるから三人」

「細かいことはいーのよ。さらだつてそう思うでしょ」

「……私、男の子と一緒に過ごしたことないからわかんない」

「あ……、なんかごめんなさい」

なんか新菜が申し訳なさそうな顔で謝っていた。

しかし、私はそれどころではなかった。

む、むう。あり得ない。絶対にあり得ないのだが、ちよつと想像してしまった。みゅーと康孝。あり得ないカップルである。けれど、頭の中で、彼らが仲睦まじい姿を想像すると、むくむくと胸の中でなぞの感情が湧いてきた。何かは考えるまでもなかった。嫉妬だ。独占欲だ。

こ、これはおかしい。さっきの、新菜とさらの時よりも数倍大きい感情だった。ちよつと昔に美優が言っていた言葉を思い出す。『アカネちゃんはあるね、束縛するタイプね』

ほ、本当にそうだったのか。私はそういう面倒くさいタイプの人間だったのか。認めたくない。

「あれ、茜。何考えてるの？」

「みゅーと康孝が付き合ってるの想像したらむかむかしてきた」

「お、おとおーっ！ 嫉妬？」

「たぶんそうだな」

「素直！ 素直でいいねお嬢様！ 康孝クンにそのこと伝えてあげたら喜ぶよー！」

「なんでだ？」

「だつて自分のことで嫉妬してくれるなんて、男の子が一番喜ぶことじゃない」

「……いや、違う。違うぞ」

「なにがよ」

「私は、恐らくみゆーが付き合うことに嫉妬してるんだ。たぶん」
「え」

新菜は何故か凍り付いたように固まった。

私はそうだと確信した。康孝にそんな感情を抱くわけがない。ならば美優だ。確かにそれならばあり得る。彼女ともまあ、長い付き合いである。それが康孝といきなり付き合うなんざ言い出したら、そりやもにもよると変な感情が出てくるものである。

「……茜って、そっちの気があるタイプなの？」

「そっちって、どっちだ」

「男の子より女の子が好きだな」

「ああそうだな。どちらかといえば私は女の方を恋愛対象として見ている」

新菜は私がそう言うと、腰を抜かしたように水に潜り、私から身体を隠すように膝を丸めて顔を赤くした。さらはいつもの無表情のままだった。

余計なことを言ったかな、とか。変な風に捉えられたかな、とか。いろんなことを思ったけど、まあ、いい。新菜に舐められっぱなしだったし、最後に一矢報いることができたんじゃないか。

私はそんな風に思って、満足した。大変満足である。まる。

あかね「ゆうれいはやばい、こわくないがやばい」

銭湯から帰ると、美優が待っていてくれた。

彼女のカレーはうまかった。ついこの間まで料理ができなかったというのに、なんとも覚えの早いやつである。

ちなみに、私はカレーを作るどころか米を炊くこともできない。ついでに言えばキッチンの方の火のつけ方もいまいっちゃわかっていない。つまア、向き不向きというヤツだ。そう美優に伝えると、「アカネちゃんの得意なことって、人を殴ること以外なんかあったっけ？」と言われた。言われたので憤慨し、なにかあるだろなにか、と考えて、なにも浮かばなかった。だいぶショックだったので、そのままふて寝した。

そんなわけで、今朝である。私は周りをきよろきよろと見回し、美優がいつものように部屋の中央で寛ぎ、康孝がせっせか動き回っているのを確認した後、外を見て、時計を見た。午前十時。なんともつまア遅い起床である。重役起床だな。

私はそんなつまらないことを思い、自分の寝相の所為で服が乱れているのを直し、ふわあ、と身体を伸ばしていると、視線を感じた。康孝だった。

「ナンダヨ」

「い、いやあ、別に」

「変な奴め」

康孝が変なのは今に変わったことじゃない。私はいつものことだと思いつつ、四つん這いになって歩く。そのまま美優にじやれつくように抱き着くと、「くさい」と一蹴された。ひどい。

「くさくないぞ。しつれいな」

「臭いって言ったのは嘘だけど。どっちにしても暑苦しいわ」

「そんなにか」

「アカネちゃん、よくもまあそんな厚着でいられるわね。今は真夏よ」

「む。確かに」

確かにそうだ。言われてみたら暑い。

普段、というか、実家に住んでいた頃、私は寝るときは下着で寝る派の人間だった。だがまア、ここでそれをやるのはまずい。私だつて馬鹿じゃない。康孝が男だということを考えてやる度量はある。別にあいつに見られようがなんとも思わないが、まア、気遣いというヤツである。

いそいそと私は服を脱ごうとして、「あ」と気づいた。そうじゃん。今康孝いるじゃん。私は勢いよくひっぺかした服を、そのままの体勢で戻した。康孝を見ると、彼はこちらをちらちらと見ながらもそっぽを向くというとても非生産的な行為をしていた。

まったく。

見るなら見るなり、見ないなら見ないなり、ハッキリとしてほしいものである。

「……お嬢様」

「なんだ。私が悪いのか今のは。そーなのか？」

「今のはアカネちゃんが悪いわね」

「そーなの!?! むう。なら謝つとく。すまん」

「……いいですけど、ちよつと色々考えないといけませんね」

康孝は真面目な顔になった。こいつは普段から真面目な表情をしているのだが、それがより引き締まった感じだった。こうなった時の康孝は中々頑固である。

「何を考えるんだ？」

「お嬢様の脱ぎ癖です」

「ぬ」私はちよつと驚いた。「脱ぎ癖なんて、そんなのない」

「あります。お嬢様、今さつきみたいなことよくやってるじゃないですか。それに、お風呂上がり到下着で出てこようとして『お、間違えた』みたい。そういうことするじゃないですか」

「するか？」

「しますよ」

私は首を傾げた。まア、確かに一、二度はしたかもしれない。それでも一度や二度である。偶然と言ってしまえる範囲内じゃないか。

そう思い、そのまま美優に聞いたのだが、「こんな短い期間で一、二度だったら、よくつて言われても仕方ないわよ」と言われた。どうやら美優も康孝派らしい。最近私の味方をしてくれない。不満の念を込めてぷくー、と頬を膨らませてみせたが、無視された。

「とにかく、何とか対処をするしかないです」

「対処つて、よーするに私が気を付けなければいいだけだろ」

「いえ。お嬢様の脱ぎ癖を矯正するのは諦めます」

「え、なんで」

「いや、その」

「アカネちゃんの頭じゃ覚えられないだろ、つて康孝くんは言いたいよ」

「な、な——！」

康孝め、そんなことを考えていたのか。

非難の目で私は康孝を見た。彼は口では「違います」と言ったが、私が「じゃあなんでだ」と尋ねる血何も言えない様子だった。そーいうことじゃん。ショック。確かに私は馬鹿である。あんまり言い返せないのがつらいとこだった。確かに、私ならこういう話をしたこと自体を忘れちゃうかもなあ……。

「まあ、私は確かに覚えられないかもしれない」

「だ、だったら、どうするかを決めましょう。案は考えてるんです」

「そうだな。いいだろう。認める。で、どんなことをする気なんだ？」

「壁を作りましょう」

康孝は真面目くさった顔で言った。壁？　なんだよ壁つて。

要するに、仕切りを作りたいらしかった。

カーテンみたいなヤツ。あれで部屋を二分割する。私と美優のエリアと、康孝のエリア。男と女でエリアを完全に分けるわけだ。

私は今のままでも何の問題もない。かといって反対する理由もない。ので、静観していたら、美優も賛成らしかった。理由は着替える場所が脱衣所しかないから。もつと気軽に服を着替えられる場所が

欲しいそうだな。

「そうも二人に言われれば、反対する気もない私は流されるしかない。」

結局、仲良く三人で仕切りを家具屋に買いに行くことになった。売ってんのかな、と小さく思ったけど、康孝が事前に聞いててくれたらしい。仕事のできる奴である。

「これなんかどうです?」

「そんなわけで、家具屋。」

康孝は「アコーディオンカーテン」と書かれたものを指差し、取り付けるための別部品みたいなヤツを適当に籠に放り込んでいた。言うまでもなく、私は金がない。美優は実家には金がたらふくあるのだろうが、この生活を送ることになってから早矢仕の影響で金の供給が途絶えている。つまり、康孝が払わなければならない。私は恐る恐る「や、康孝。こんな高いので大丈夫なのか」と聞いた。

すると、彼は噴き出すように笑った。な、なんだよ。

「お嬢様、最初に家を決めるときとは大違いだね。」

「あ、あの時は金銭感覚がな……今の私はマトモだ。マトモだぞ」

「まあ、大丈夫ですよ。一応、僕貯蓄もしてるんで」

「……一つ貸しだな」

「貸しだなんて思わなくてもいいですよ！ お嬢様なんですから」

もう私の家が没落したとは思えない言動である。康孝らしい。

「というか、貸し一とかいえないレベルで康孝に色々なことをしてもらってる気がする。私はどーやってこのたまりにたまった貸しを返せばいいんだろうか。むう。思いつかない。」

「康孝さーん、お菓子も買っていい?」

「……美優さん?」

「わ、わかつてるわよ。怖い顔しないで頂戴」

美優はいつも通り私の陰に隠れた。可愛いやつである。

そんなわけで、「アコーディオンカーテン」とやらを部屋に取り付けることになった。店の人に頼めばそこまでやってくれるらしいが、今

の私はお嬢様じゃない。そんなことで虎の子の諭吉を消費できるよ
うなご身分ではないのである。

取り付け作業は私と康孝が受け持つことになった。美優はその間
部屋の隅っこでぐーたらしていた。まあ、彼女がこういう時に働かな
いのはいつも通りである。私は康孝への借りもあるし、力仕事ならば
私の得意分野だともいえる。部品の組み立てだとか、そういう細かい
部分は康孝に任せて、運搬をメインに行った。

「できたなア」

「そうですね」

「終わったの」

三者三様。

出来上がった「壁」を見つめて、感慨深げにそう言った。

「うむ。割かし疲れたな」

「あら。アカネちゃんなら朝飯前じゃなかったの?」

「私にだって体力つてのはある。あと、私、寝起きは弱い方なんだよ」
「そうだったわね。まあ、今日はなんもやることないし家で寝てたら」

美優は軽く伸びをしながら言った。そのままの勢いで、羽織ってい
たガウンをさらっと脱いだ。

「あ、康孝くん。私服脱ぐからそれ閉めて」

「あ、はい」

「どーして着替えるんだ? 出かけるのか」

「着替えるんじゃないやなくてお風呂に入るの。外出て汗かいちゃったも
ん」

「今日家でないんなら夜でいいんじゃないのか」

「綺麗好きなの、私」

その言い分だと私が綺麗好きじゃないようで大変不満なんだが。

「ああ、康孝。だったら午前中は閉めたままにしてもらってもいいか
?」

「いいですけど、どうして?」

「私も少し仮眠をとりたくなった」

「寝るときは夜以外でも閉めた方がいいですよ、やっぱり」

「……ていうか、私、寝るときは下着で寝たいんだよ」

「——ああ」

納得してくれたらしかった。妙に返事が遅かった理由がわからんが。

のそのそと私も服を脱ぐ。美優と一緒に服を脱ぐというのは何とも妙な感じだ。そう思いながら美優の方を見ると、彼女も同じようなことを考えていたのか、恥ずかしそうにちよつと笑った。可愛い。

「それじゃ、私は風呂入るけど。アカネちゃんも仮眠終わったら風呂入った方がいいわよ」

「そうか?」

「夏に仮眠取ったら汗かいちゃうじゃない」

「まアそうか」

私は素直に頷いた。風呂は嫌いじゃない。何なら今から美優と一緒に入ってもいいな、なんて考えたが、うちの風呂はそんなに広いわけじゃなかった。む。どうやら昨日の銭湯に考えを引きずられているらしい。

また行きたいものである。昨日のダンジョンによる報酬は、一月後に入ってくるらしい。ダンジョンに定期的に行けば、まアある程度稼ぐことはできるだろう。それでこの家の家賃、電気代、雑費、様々なものを支払っていける。その残りの分は、どうせ使い道もないのだから銭湯に使うのもいいか、と思った。美優と康孝は銭湯というものを知っているのだろうか。多分、康孝は知ってるだろうな。でも美優はどうかかわからない。彼女と銭湯と一緒に浸かるといえるのは、なんとも楽しそうである。

私は下着になり、毛布一枚に包まりながらそう思った。もう寝るか。自慢じゃないが、私は寝ようと思ったら一瞬で寝られるタイプの人間である。意識が少しずつ遠くなるのを感じながら、私はうつらうつらとして……

——さすり、と肌を撫でられる音がした。

「わひゃあ!?!」

変な声と一緒に眠気が飛んでってしまった。

な、なんだ！ 肌が撫でられた。どーいうことだ。私は慌てて立ち上がったが、誰もいない。聞こえるのは微かな鼻歌。美優が風呂場で歌ってるものだけだ。

と、いうことは……。

「……康孝」

「な、なんですか？」

「オマエ、そういうつもりか。そーやって貸しを返させようとしてるのか。とんでもないぞ。ひどいぞ」

「な、なに言ってるんです、お嬢様」

「……お前、こっちに入ってきただろ？」

「入ってませんよー！」

「む」

康孝は本気で入ってなさそうだった。

わ、私の勘違いか。い、いや、でもなあ。ハッキリ触られた感触があったんだが。流石に間違えないと思うんだが。

私は思い直して毛布に潜り込み——すぐに飛び起きた。

「うおっ！」

なんか中に人がいる感触がした！

どーいうことだ。や、康孝か。康孝が私の毛布にテレポートしたのか。なんて奴だ。い、いや、流石にあり得ない。私はとても戸惑った。戸惑って、さまざまなのが頭の中を過ぎった。「人」「感触」「毛布」何の意味もない単語が脳内を巡り、それらの単語が結びつくこともなく、考えが何も纏まらず——最後に、ふと思いつくことがあった。

幽霊。

私は勢いよく布団から出た。足元に落ちている服を一瞬で着た。毛布を蹴り飛ばし、そのままの勢いで走る。

後ろをちらつと見ると、蹴り飛ばしたはずの毛布が意志を持つかのように少しずつ動き出しており——

「——きゃあああああああああああーっ!!」

「お嬢様!?!」

私は壁を開けてそのまま康孝のエリアに飛び込んだ！

あかね 「ゆうれいのおもわくが、わかってしまった」

「ゆ、幽霊だ。幽霊がでた！」

「幽霊？」

康孝は少し安心したような顔になった。こ、こいつめ。信じてない。私は震える手で開けたカーテンの向こうを指差した。そこには揺らめく毛布がある。誰も、何も触っていない無風のこの空間で、ゆらゆらと独りでに動いている。それを確認して、康孝はなんか墜落したUFOを見たような辛気臭い顔に一瞬なり、すぐに慌てた。

「——うわあああああああああああ——っ!？」

「ちよー！」

康孝が抱き着いてきた。こ、こいつめ。美優みたいなことをしやがって。

頭を軽く叩いてやるが、康孝はそれどころじゃない様子だった。

「アカネさん、やばいですよあれ。マジモンですよ。本当に、幽霊ですよ」

「そーだよ、やばいんだよ。で、お前どさくさに紛れて何抱き着いてんだ」

「アカネさんだって同じじゃないですか」

同じだった。

いつの間にか、私も手を康孝の方にまわしていた。なんとというか、抱き着くというよりも、お互いに肩を組み合っていて、ラグビーのスクラムみたいになっている。

「お、お前、恥ずかしくないのか。男だろ」

「アカネさんだって男なんでしょ、一応！」

「た、確かにそうだがな……」

「男に守ってもらいたいんですか！」

「なにおうー！」

康孝がだいぶおかしくなっていた。失礼な。こんな失礼なことを言う康孝なんて見たことない。

ただまあ言ってることはその通りだ。私は康孝の手を振りほどぎ、ゆらゆら揺れる毛布から何とか目を逸らしながら、カーテンを閉めた。ふう、と一息を吐く。康孝も少し落ち着いたようだった。

「康孝、お前な。中々今日は言うこと言うじやないか」

「す——すみません！ ちよつと頭がおかしくなってます」

「見たらわかる。しかしまア、ひとまずは落ち着いた。あの化け物さえ目に入らなければ大丈夫だ」

「そうですね。でも、これからどうしましょう」

「……もう少ししたらみゆーが風呂から出てくるはずだ。あいつは幽霊を信じない。だからビビらないってことはないけど、まア、今の私たちよりかは冷静な判断をしてくれるはずだ」

「そうですね。……ていうか、なんで美優さん気づかないんです」

「あいつは風呂の最中は完全に自分の世界に入るタイプだ」

「……そんなタイプあるんですか？」

「ある。みゆーしか知らないけども」

そんなことを康孝と言い合いながらも、私はだいぶ落ち着きを取り戻していた。

危機的状况をなんとか脱することはできた。早くこの家から出なければならぬ。本当に幽霊物件だったのだ。どーして今まで幽霊が出なかったのかとか、さまざまな疑問はあるが、とにかく。どこでもいいから逃げださなければ。

私はそう決心して、康孝にそう話しかけようとして、固まった。

康孝は酸欠の鯉みたいな感じで口をぱくぱくとさせて、カーテンの方を指差していた。見てくれ、とこちらに呼びかけているらしい。私はその時点でだいぶ嫌な予感がした。まずい。見ない方がいい。でも、見るしかないよな。私は恐る恐る、そんなこわくないものであつてくれ、と祈りながらそちらを見て。

閉められたカーテン。そのわずかな隙間。

そこから、自己主張するように、毛布が少しずつ入り込んできていて——

「わひゃあああああああああああああああああ！」

「きやああああああああああああああああああ！」

二人して大声を上げて、お互いに抱き着いた！

「や、康孝！ お前なに私の後ろに回ろうとしてんだ！ みゅーじゃないんだから前に出ろ！」

「アカネさんこそどーして僕に隠れようとするんですか。ほら、あのダンジョンの時みたいにパンチで蹴散らしちゃってください！」

「毛布殴ってどうなんだよ！ あーいう霊体はな、物理攻撃は効かないんだよ！ 稲川淳二が言ってたから私はわかるんだ！」

「実際やってみないとわかんないじゃないですか！」

「じゃーお前がやってみろ！ なんだ康孝、女の子に守られて恥ずかしくないのか。男ならまっすぐ行つてまっすぐ死んでこい！」

「都合のいい時だけ女にならないでください！ それじゃもうずーつとアカネさん女の子扱いしても怒らないでくださいね！」

「な、なにおーっ！」

こんなことを言い合っている間にも毛布はじりじりとこちらのエリアを侵食してきていた。ま、まずい。康孝が使い物にならない。最近よく使い物にならなくなっている気がする。人のこと言えんけど。

こうなつたら、逃げるしかない。こんな家にいられるか！ 私はどっか違うところに行く！

そう思い、私は窓をぶち破つて外に出ようとする。が、よく見たらこちら側に窓はなかった。そうだ。カーテンで区切った向こうにあるんだつた。まずい。逃げられない。

「康孝あ」

「なんですか！」

「この壁ぶち破つたりしちや、ダメかな？」

「駄目に決まつてんでしょ！」

ダメらしかった。

しかし、そこ以外に退路はない。もうあの化け物はこっち側に入ってきてしまう。私は再度康孝に聞いた。「本当にいいのか」「このままだと逃げられないぞ」「壁壊しちやおつか？」康孝はなんか微妙な顔に

なりながらも、首を縦に振りかけていた。こいつもだいぶ頭がおかしくなっているのである。私はそんな康孝の返事を待たず、昨日のダンジョンさながら、全力で拳を叩きこもうとし――

「――アカネちゃん、何やってんののお？」

美優の声がしたので、慌てて振り返った。

カーテンが開かれていた。そこで美優がにやにやとしながら立っており、毛布はその足元で意志をなくしたように落ちていた。いや、それが当たり前なだけ、なんかへんな気になる。

「みゅー。助かったぞ」

「助かったのは良いけどさ、アカネちゃん、康孝君となんでそんなに密着してんの？」

「あ？ あ――」

私はすぐに康孝から距離を取った。そーだった。

「色々あったんだ」

「私がお風呂に入ってる間に？」

「そーだな」

「いやらしいことが？」

「そーじゃない！」

私はぶんぶんと首を振った。康孝も同じような仕草をした。美優はそれを見て只々笑っている。

「あやしーなあ」

「お化けが出たんだよ」

「お化けえ？」

「ああ。その足元にある毛布に霊が宿ってな、私に引っ付いてきた。それから逃げるために、こっちで康孝といたってわけだ」

「アカネちゃん、お化け怖くないんじゃないの？」

「こわくない。ただ、ちよつと驚いちゃっただけ」

「わざわざ康孝君の方に逃げてまで？」

「康孝がビビり散らしてたからな。私が守ってやる必要があった」

「どの口が言ってるんですか。お嬢様滅茶苦茶ビビってましたよ」

「な、なにお！」

今日の康孝はいつもにも増して失礼だった。ただまア私への呼び方が「お嬢様」に戻ったので、だいぶ落ち着いてはきているらしい。「でも、どうしてももう、動かなくなっただんでしようね」「確かにな。さっきまであんなに活発に動いてたのに」

私と康孝は冷静になつてみる。

どーしてあの化け物は動かなくなったんだ？ あんだけ私たちを脅かそうと必死だったのに。なにか前後であつたか？ 変わったことが。

「……康孝君もそんなの信じてるのね。いい、お化けなんていないのよ。アカネちゃんも少しは冷静になつて頂戴」

私と康孝は美優を見た。二人して顔を見つめると、美優は少し赤面して「なによ」と睨みつけてきた。私と康孝の目線は顔から少しずつ下にずれていき、ある一定のところで止まった。

この家に住む前、康孝が言っていたことを思い出す。たぶん、康孝も今思い出してるんだと思う。この家にはどんな幽霊がいるんだっけ。確か自殺した幽霊が住み着いてるんだつたな。何で自殺したんだ？ 確か……好きな人の胸が揉めなくて自殺したとかいう、中々微妙な死因をしている奴だった。

と、いうことはだ。

「……そーいうことか」

「……そうだったのか」

私と康孝は納得した。これまで三人でいるときに現れなかった理由もピンときた。

美優がいたからだ。そーだな。美優、胸が小さいもんな。そういう対象じゃなかったわけだ！

「事件解決だな、康孝」

「解決ですね、お嬢様」

「二人して何を言ってるの。すごーく私に失礼なことを考えているのはわかったから、とりあえず一回頭を殴ってもいいかしら？」

あかね「やすたかが、でーとにいくらしい・・・」

康孝と二人でダンジョンへ行くことになった。

特に理由はない。他意もない。単に行きたくなっただけである。

美優からは「早く帰って来なさいよ」と伝言を受けている。理由は暇だかららしい。まア、確かに申し訳ない話だ。そんなわけで、私と康孝は朝早くにダンジョンへ向かうことになった。

「昼には帰りますからね、お嬢様」

「ああうん。わかってるぞ。大丈夫だ」

「絶対ですからね」

「当り前だろ。みゅーが暇しちゃうからな。私にだってそれくらいの分別はある」

私だってそれくらいはわかっている。康孝め。失礼な扱いをしようがって。

「で、なんで新菜とさらはいないんだ？」

「そろそろ学校の宿題がやばいらしいです。高校生ですからね、彼女たち」

「あー……そうか」

学校。

そんなものもあつたなあ、と思い出す。

私も年齢で言えば高校生である。ちよつとまア、諸事情で通えなくはなつたものの、懐かしさは覚える。美優の奴め、ちやんと宿題はやっているのだろうか。私も暇だしなにか手伝えることがあつたら手伝ってあげたい。多分何も役に立てないけど。

「今日も地下一階までか？」

「当然ですよ」

「ちよつとだけもう一階下まで見たりとか……？」

「駄目です。せめてお嬢様も僕みたいな防具を付けてからにしましょう」

「それ、何円なんだ？」

「二十万円くらいですね」

「たっけー」

素直にそう思った。私の金銭感覚が治ってきている証拠である。康孝も満足そうにうんうんと頷いていた。

「ちよつと気になったんだけどさ」

「なんです？」

「ダンジョンって、この街以外にもあるんだよな」

「そうですね。そんな頻繁に見つかるものじゃないですけど、一県に十か所くらいはあります」

「今度違うところに行ってみるのも良いかもしれないな」

私はそう言つて、呆れられるかな、と思つた。いろんなダンジョン行きたいなー、よくわからんモンスターぶん殴りたいなー、みたいなのが浅はかな考えから漏れた言葉だったからだ。大体、私は金がない。そんな遠出をするにも金がかかるのである。

だからそう思つただけけど、康孝は呆れるそぶりも見せずに笑つた。

「いいですね。観光がてら。向こうのダンジョンでお金を稼いで、それを費用にしたらまかなえると思いますしね。それに——」

「それに？」

「お嬢様、昔はよく海外に旅行行つてましたもんね。行けなくなつてから詰まらないですよ。僕が安くできる観光を教えますよ」

そう言つて、康孝は楽しそうに笑つた。

……

……こいつは、やっぱりいいヤツだ。元来、康孝とはこういう人間なのだろう。

妙に恥ずかしくなつて、私は自分でも赤面すると判つていながら口を開いた。

「康孝。オマエ、モテるだろう」

「え、ええ!?! お嬢様、なんですすか急に!」

「ふん。ちよつと思つただけだ」

私は平然を装つて、肩をすくめながら言つた。

三度目である。

私はなんなくゴブリンたちを跳ね除け、地下一階に辿り着いた。毎回変わるダンジョンの構成。それは即ちゴブリンたちもまた別個体だと思っただが、毎度毎度のようにへばりついてくる。私の何が彼らをおびき寄せているのだろうか。体臭か。体臭なのか。そうだったらだいぶシヨックである。

「お、なんだあれ」

「二足歩行の馬みたいなやつですね」

「敵意がない感じか——うお!？」

「お嬢様!？」

馬の化け物は私たちの方を見ながらのろのろ歩いているかと思うと、急に走り出してタツクルしてきた。

完全に油断していた。まったく身構えていなかった私はそのタツクルをもろに受けて、そのまま抱きかかえるようにして組みつき、ぶん投げた。

「うおりゃあー!」

馬の化け物は壁にぶつかって沈黙した。こんなもんである。

「驚いたな、康孝」

「……お嬢様って、だいぶ人間じゃないですよね」

「しつれーな。驚いたって言っただろ」

「あのタツクルを受けて驚いたで済むから言ってるんですよ」

「まア、喧嘩はだいぶ慣れてるからな」

「そういう問題じゃないと思いますけど……」

康孝はだいぶ呆れているようだった。ちよつとかなしい。

昔から、打たれ強い方だったのである。ただそれだけの話だ。本当にそれだけで済ませていいのかはわからないが、何より、私に聞かれなくても困るといのが本音である。

「あんなモンスター前いなかったぞ」

「地下一階からはどんな化け物が出るかもわからないですよ。敵意

を持つてるかも、友好的な感じかもまったくわからないです」

「それなら全員ぶん殴ってけばいい感じか？」

「そういう人が多いですけど、僕はしません」

「どーして？」

「敵意のないものを攻撃するのって、気分が悪いじゃないですか」

康孝らしい意見だった。気持ちはわかる。

私は物知り気に頷いておいた。康孝の方が、ダンジョンの経験で言えば先輩である。私からしてみれば全員ぶん殴ってもいいし、敵意を判別してからでもいい。どっちでもいいのならば、康孝の意見に従っておくべきだろう。

「康孝もあのモンスターを見るのは初めてだったのか」

「はい。協会に行けば凶鑑があるのでわかるかもしれないですけど」

「そんなのあるのか。その、協会？」

「役所みたいなところですよ。ダンジョンに潜って、見たことないものを見たら、その管理人に報告する義務があるんです。その情報の集合体が、協会にあります。凶鑑に載ってないやつを報告したらちよつとお金ももらえるんですよ」

「お。じゃあ、あいつで貰えるかもしれないのか？」

「そのためにはカメラが何かで撮らないとだめでしたね」

「あ！ じゃあ惜しいことしたんじゃないか？」

「凶鑑に載ってないモンスターなんて、本当に稀ですもん」

康孝はちよつと笑った。確かにそうか。知らないモンスターが出て、その度にカメラを構えて、なんて面倒だもんな。それでもう凶鑑に載ってました、だったら無駄すぎる。

「しかし、そんな面白い物が見れる場所があるんなら行けばよかった」

「じゃ、じゃあ、今度一緒に行きますか。そ、その、息抜き、がてら」

「……？ あー、いいぞ。美優も連れてくか。あいつも暇だろーしな」

「そ———そうですね、はい」

康孝は何故か挙動不審になっていた。こーいうところである。

こーいうところがなければまア、中々頼れる奴なのだが。

そんなこんなで、ダンジョンを後にした。こんだけ？　と思うかも知れないが、私も思っている。折角ダンジョンに潜ったのに、適当なモンスターを倒して終わり。特に深入りをすることもなく、意外な出来事が起こるわけでもなかった。康孝に「もー少しだけここにいようよ」と駄々を捏ねてみたが、無言で十一時を指す時計を持ち出されると何も言えなくなった。

そーだよな。美優を一人にしちゃかわいそうだもんな。

てなわけで、帰宅した。家に帰ると美優はすでに起きて、昼飯の準備をしていた。

「みゆー、わざわざここまでしてくれなくてもよかったのに」

「料理するのが趣味になりつつあるのよ。アカネちゃんもやってみたら」

「わ、私が？　む、むう、じゃあ……今度」

「あ、嘘。アカネちゃんがやったらマトモなものができないわよ」

「な——！　舐めるな！　今度美味しい料理作ってやるかな！」

「はいはい。期待せずに待っててあげるわ」

美優はちつとも信じていない様子だった。

そんな彼女が作った昼ご飯はチャーハンだった。三人仲良く「いただきます」と手を合わせて、私はスプーンを動かす。む。うまい。本当に料理がうまくなったなア、美優。

「それで、今日のダンジョンはどうだったの」

「特に何もなかったな」

「平和で良かったわね。……で、アカネちゃん、怪我はない？」

「当然だろ。あのなあ、みゆー。私が喧嘩で一度でも怪我したことがあったか」

「だってモンスター相手じゃない。無敵のアカネちゃんでもちよつとは心配よ」

「ちよつとなのかよ」

「信用はしてるもん」

唇を尖らせて美優は言った。やっぱり、なんだかんだ美優もいいヤツである。性格は悪いけど。

私はチャーハンを食いながらそんなことを考えて、「あ」と思い出した。ついさっきのこと。ダンジョンに潜りながら康孝と話していたことである。

「ちよつと遠出する気はないか？」

「どこにいくのよ。お金ないじゃない」

「ダンジョンがあるところに行つて、そこを探索して稼ぐんだ。最初の階層くらいなら美優だつて行けると思うし、暇はさせないぞ」

「へえ、そういうことね。アカネちゃんにしてはいい考えじゃない」

「康孝と考えたんだ」

「成る程ね。で、どこに行くの？」

「そーだな……」

正直な話、どこでもよかつた。私の目的はダンジョンが一番で、觀光が二番だ。そもそもどこにダンジョンがあるのかなんて知らないし、すぐに調べる方法もない。また近所の小学生とコンタクトを取らなければならなくなる。

「駅から大体一時間弱くらいにここにありますよ」

「康孝。知ってるのか」

「数回行ったことあります。ダンジョンの中もそこまで危険じゃないですし、美優さんでも全然問題ないと思います。田舎ですので泊まる費用もそこまでかかりませんし、よろしければ僕が観光の案内をしますよ」

康孝は妙に自信があげだつた。

私は美優を見た。特に彼女も文句がなさそうだつた。それどころか、「旅行なんて、久しぶりね」と乗り気な様子だつた。そーなのか。美優、旅行好きだつたのか。知らんかつた。よく考えてみたら、彼女とは古い付き合いだが、あまり一緒に旅行に行きはしなかつた。そう考えると、確かに、久しぶりだ。私も妙に楽しみになってくる。

で、いつ行くかだ。正直いつでもいい。私に予定はないし、美優にだってないはずだ。明日でも。何なら今すぐにでも、と言えるのが私たちだ。恐らく、康孝だつてそうだろう。私はそう思いながら康孝を見たが、彼は困つたような表情を浮かべていた。

「ちよつと、明日は用事があるんですよね」

「用事か」

ふうん、と思った。まあ、用事がある時もあるわな。

私はそれで納得したが、美優は納得しなかった。彼女は洋画の黒人みたいな気軽さで「どこ行くの？」と聞いた。別にどこでもいいーだろ。私は仏頂面で彼女を眺め、

「明日、女の子と会うんですよ」

「な、なに——っ！」

どういうことだ！

私はすぐにどーでもよくなかった。美優も同じ様子だった。

「だ、誰と会うんだ!？」

「えと、お嬢様は知らないと思いますけど、ちよつと前に新菜さんに女の子を紹介してもらったんですよ」

「……康孝。お前も女と付き合いたかったんだな」

「康孝君も女日照りだったのね」

「違いますよ！ 紹介っていうのは、ダンジョンに潜る際のバディが欲しかったんです」

「私じゃ駄目なのか……」

「違いますって！ だいぶ前でお嬢様がまだダンジョンに潜る前のことです」

「そーいうことか。で、なんで会うんだ？ ダンジョンに行くのか」

「いや、前ダンジョンへ行った記念で、ご飯でもどうかって誘われたので」

「成る程な」

納得した。そーいう理由なのか。てつきり康孝に彼女かなんかがいるのかと思った。

私はうんうんと頷いていると、美優が肘で私の脇腹を突いてきた。

「ひゃん！」と変な声が漏れてしまう。なにすんだ！

「アカネちゃん、変な声出さないでよね」

「じゃあ変なことするな！」

「で、いいの？ 康孝君がデートに行っちゃうけど」

「どーしてそれがだめなんだ」

「アカネちゃん、束縛強いじゃない」

「つよくない。ていうか康孝、その女と付き合ってるわけじゃないだろ？」

「勿論です！ そーいうことはまったくありません！」

「お、おう……だってよ、みゆー。だからデートじゃないぞ」

私が呆れながらそう言うと、美優はもっと呆れた顔になった。な、なんだよ。まるで私が間違っているみたいでちよつと気圧された。

「甘い。甘いわねアカネちゃん。ゲロ甘だよ。経験則から言っつてね、こーいうときに食事に誘われるっつてことは告白されるっつてことだよ。実質デートなわけ」

「……そんなことはないと思いますけど」

「ていうかみゆーっつて満足な恋愛経験あるのか？」

美優は耳を塞ぎながら「あーあー」と言っつて聞こえないフリをした。都合のいい女である。

私がつめ息を吐いていると、美優はこそつと私の方に顔を近づけてきた。「でも」と前置きを言い「本当にいいの？」と囁いた。「このまま康孝君がデートに行っつて、結果付き合っつちゃうことになったとしても、本当に平気なの？」

いや。

平気かって、言われたら。

「平気に決まっつてんじやん！」

あかね「へんそらを、してみることにになった」

平気じゃなかった。

そんなわけで、私と美優は康孝の尾行をすることになった。

「アカネちゃんも気になっちゃったのね」

「そーだな。とても気になってしまった」

「茜も康孝クンに結局惹かれてたわけか」

「そーじゃない。てかなんで新菜がいる」

私はいつの間にかいた新菜を見て、肩をすくめた。美優の隣のポジションを確保して、当たり前前みたいに行っていた。

「夏休みだから遊びたくなっちゃったの」

新菜はぺろり、と舌を出した。かわいこぶったその態度は、控えめなしに可愛らしかった。

私が素直にそう思っただけで彼女を見つめると、「ひ」と悲鳴にも似た声で美優に隠れた。な、なんだ。どーしてそんな怯えた感じになってるの。あれか。私、今殺気とか出しちゃってるのか。

「アカネちゃん何やったのよ」

「私は何もやってない！」

「そんなわけないじゃない。新菜ちゃんめっちゃ怯えてるもん」

「なんでだー！」

「……そ、そのお」新菜の顔は妙に赤かった。「怯えてるっていうか、警戒してるっていうか」

何のことかわからなかった。私は首を横にくくと倒す。

「ほら……その、茜って、前、女の子の方が好きって言ったから」

「あー言ったな」

「そーいう目で見られてると思うと緊張しちゃうじゃん」

「そーいう目で見えてないから安心しろ。当分私は彼女を作る気はない」

そんなことよりも戦うことの方が重要である。つまり、ダンジョンに潜ること。

だからまあ心配することはないのだが、それでもまだ新菜は半信半疑といった様子だった。

「まあ、アカネちゃんは大丈夫よ。たぶん」

「美優はそーいう目で見られたことない？」

「ないわね。仮にあってもどーでもいいわ」

「大人の女ね……」

新菜は妙に尊敬のまなざしで美優を見ていた。

いや、そいつ恋愛経験ないから。美優もなんでどや顔してるねん。

「でも、茜も康孝クンを尾行するんだから、やっぱりそーいう気はあるんでしょ」

「どーいう気だよ」

「気になってるってこと」

「そりゃ、気にはなる。あいつとは長いんだぞ。一応主従だ。そんな奴が、女の子に告白されるってわけだから、多少は気になる」

「多少で尾行するの」

新菜は手痛いことを聞いてきた。確かにまあ、多少じゃないのかもしれない。でもそうだろう。昔から付き合いのあった奴が、私の知らないところで知らないヤツと付き合うってなったら、だいぶ気になる。尾行するのが正しいことかって聞かれたら、違うのかもしれないけど、それくらいはしたくなるのが人の性つてもものだろう。じゃないか？

私は自問自答して頷いていたが、美優と新菜は違うらしかった。

「ほら、アカネちゃんも男っぽく見えてだいぶ束縛するタイプだから……」「ああ……」そんな会話が聞こえてくる。束縛してない。してないはずである。私は開放的でストレスフリーな女、いや、男だ。そーだろ？

「新菜、康孝が言ってたけど、お前宿題大丈夫なのか」

「あれはもう問題なくなったよ」

「数日で終わらせたのか、凄いな」

「や。一日だけ真剣にやって、この集中力を何日も続けるのは無理だなーって思ったから、諦めた」

新菜らしい考え方だった。私だって休みの間の宿題はちゃんとやっていたというのに。まあ、殆ど美優に手伝ってもらっていたような気もするけど。

「てか、康孝中々誰とも会わないな。ずっと歩いてるだけだし」

「もーちよつとよ」

「なんでわかる、みゆー」

「昨日言ってたじゃない。フランス料理の『パリ』でランチだって」

「そんなこと言ってたのか」

まったく聞いていなかった。

新菜は「フレンチ！」と妙に嬉しそうな顔で叫んだ。なんだ。フランス料理がなんなんだ、と私は思い、聞くと、彼女は楽しそうに言った。

「だって、フレンチでランチなんて、オシヤレじゃんか」

「そーなのか。フランス料理は美味いが、お洒落なのか」

「そー。初デートはフレンチって相場が決まってるもん」

「新菜も今までそーいう風にしてきたのか」

「ま、まあ？ そーいう風にする予定だね」

適当に濁された。こ、こいつ。まさかこの見た目とこの雰囲気で彼氏がいたことがないのか。ま、まあ、私が言えた立場じゃ当然ないんだけど。

みゆーも当然ないから、この三人は恋愛的に見たら大変役立たずであるらしい。

「あー！ 入ったわ！ 本当にフレンチよ！」

「そらそらだ。で、どうする。流石に中までは入れないよな。バレるしそんな金ないし」

「私に考えがあるわ」

美優はそう言うと、こそこそと手招きをした。なんだ、と思いつながら新菜と一緒に歩いて行ってみると、裏路地から、「パリ」の裏口みた

いなどこにでた。

こんなどこに来てどーする気だ。私はそう思い、あ、と気づいた。「みゆー、お前、忍び込む気だな。いけないんだぞ。不法侵入だぞ。馬鹿だなア」

「……アカネちゃんに馬鹿って言われるとそこはかたく腹立つわね。違うわよ」

「なに」

「もう話を通してのよ。この店広いから、裏口から入って店内に忍び込めば康孝くんには気づかれないわ」

「成る程な。……でも、金はどーすんだ」

「それを含めて話は通したわ。料理は出てこないから、中にいるだけ」
「話を通したって」

「この店、家族でよく来てたのよ。オーナーと仲いいの、私」

ぶるじよあだ、と新菜が言った。私も大きく頷く。

「とにかく、行きましよう。早くしないと康孝君が告白されるとこ見逃しちゃうじゃない」

美優はそんな風に言いながら、せわしない様子で裏口の扉を開けた。

なんだかんだこいつも、康孝が告白されるかどうか気になっているのである。

裏口から入ると、なんか手狭な部屋みたいなところに出た。大学生くらいの男が一人、椅子に座って携帯を弄っており、美優の顔を見つけると「おー」と手を振った。美優も同じようにしている。

「だれだ？」

「バイトくん。顔見知りよ」

「ちなみにここはなんだ？」

「待機部屋とかじゃないの」

そんなものがあるのか。バイトしたことないから構造がわからん。ここにここと男がこちらにも手を振ってきた。まア、無視するのも申

し訳ない。私は無表情で手を振り返してやる。新菜は嬉しそうにここにこして手を振っていた。中々イケメンだからな、あの男。

「オーナーから話は聞いてるよ」

「あつちに出れば康孝君に気づかれぬ？」

「うん。けど、その康孝って子と君達って知り合いなんだよね」

「そうだけど」

「だったら、偶然目とか合っちゃったらずいんじやない？」

「それもそうね。でも、それはどうしようもないわ」

「変装してつたらどーよ」

変装？ と美優は首を傾げた。私も、新菜も同じような感じだった。

男は後ろ手に、物置みたいなどこの扉を開けた。がらがら、と武骨な音が響き渡り、中には様々なものが置いてあった。上着やズボン。帽子、サングラス。何故かウィッグもある。「従業員のもの置き場みたいな風になってるから、好きなの使っていいよ」と、男は気軽に言った。

「どうする？」

「私は変装してもいいぞ。してみたい」

「あたしもいいよ。マスク付けるくらいで十分だけど」

「それじゃ、決まりだ。適当に見繕ってよ」

そう言われて、私は少し考えた。変装をするなんて、初めてである。まどろっこしいことは好きじゃなかったが、こういう機会はありません。これが最初で最後の経験だと考えると、無性に楽しく、真剣に取り組まねばならない物事に思えてきた。

ウィッグを取る。薄茶色のストレートロング。黒髪ショートのは私とは真逆で、今の状況からするとちようどいい。それを無造作に、頭に嵌める。芸能人がしてそうな丸っこい眼鏡も置いてあったので、それもかけてみる。あとは、帽子でも被ってみようか。そう思ったが、ウィッグの上に帽子を被ったら形が変になるような気がして、やめた。あとは羽織っているのを一枚脱いで、ハンガーにかかっているやつを適当に選んで羽織る。

これでいいか。

そう思い、美優たちの方を見たら、彼女たちはまだどう変装するか悩んでいる様子だった。「そんなに悩まなくてもいいだろ」と茶々を入れると、美優と新菜は不満げにこちらを見て、固まった。

「あ——アカネちゃん、だよね」

「あ、茜……ですよね？」

見るからに戸惑っている感じだった。片方は敬語になっていた。どーいうことやねん。

「何か変なのか、私」

「いや……変っていうか。アカネちゃんぽくないっていうか」

「そのための変装だろ」

「そうなんだけどね、どうも、今のアカネちゃんには喧嘩が似合わない感じがする」

「……………なんだ。いつもの私はそこまで乱暴な感じだったのか」

確かに私は喧嘩が大好きだけど、外見が乱暴に見えるとは思わなかった。

そこで、「うーん」と美優は少し考えこみ、頬を赤くして、「白状するとき」と変に語尾をもによらせながら、「アカネちゃんがだいぶ可愛くて、驚いちゃったの」なんてこっちが赤面したくなるような台詞を口にした。

「———そ、そうなのか」

「えーそうよ。女っぽいわ。女女全開って感じよ」と、美優。

「オンナノコっていうか、今どきのジョシコーサーらしき全開だね」と、新菜。

「すっごく見違えたよ」とイケメン。

「……………とつてもこの変装をやめたくなってきたが、我慢する」

私は大変不快になった。男だつっの。それを見抜けなかったイケメンも敵である。ていうかなんだ。このイケメン、見違えたって私のことをなんだと思ってやがったんだ。むかつく。それはそれでむかつく！